

地理A, 地理B

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

地 理 A

1 前 文

大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）は、大学（専門職大学、短期大学、専門職短期大学を含む。以下同じ。）への入学志望者を対象に、高等学校（中等教育学校及び特別支援学校高等部を含む。以下同じ）の段階における基礎的な学習の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的としており、この目的自体は、従前の大学入学センター試験（以下「センター試験」という。）と基本的に同様である。

一方、共通テストでは、平成21年告示高等学校学習指導要領（以下「指導要領」という。）において育成することを目指す資質・能力を踏まえ、知識の理解の質を問う問題や、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視して出題することとなっている。地理の問題作成方針にも、思考の過程に重きを置きながら、地域を様々なスケールから捉える問題や、地理的な諸事象に対して知識を基に推論したり、資料を基に検証したりする問題、系統地理と地誌の両分野を関連付けて問題を作成すると示されている。

ここでは、本年度の問題について以下の視点から分析し、上記の共通テストの目的や趣旨が実現されているかどうかについて評価したい。

- ・問題の内容・範囲は適切であったか。
- ・問題の分量・程度は適切であったか。
- ・問題の表現・形式は適切であったか。

2 内 容・範 囲

第1問 現代社会における地図と地理情報の活用に関する大問である。地形、地理情報、主題図や、自然災害と防災に関して、基礎的な知識・技能とともに思考力を働かせて考察したり選択・判断したりする力を問う大問であり、適切に知識・技能や思考力等が問えている。

問1 新旧地形図を比較して地域の変化を読み取る問題。基礎的な読図の問題で、比較する範囲が明確に示されているので解きやすい。

問2 空中写真から読み取った土地利用の成因を微地形から考察する問題。微地形の形状と分布や特徴まで踏み込むことによって、知識の理解の質が問えている。

問3 地域の交通システムを経路及び距離と所要時間から推察する問題。難易度は高いが、推察の過程で思考力・判断力が適切に問えている良問である。

問4 地図化する統計データを異なった主題図で表現した時にその妥当性について問う問題。GISの普及は地図作成を容易にしたが、同時に適切な地図表現を選択する力の育成が求められる。

問5 地形等から大雨に伴う災害発生リスクや避難場所について考察する問題。考察の過程では読み取りの技能だけでなく、判断力が適切に問えている。

問6 GISが災害への対策を検討する点で大きな役割を果たしていることを問う問題。知識としては高度だが、日常生活から十分に推察できる程度である。

第2問 世界の食文化の伝播や多様性、及び持続可能性に関して、実際の授業を想定した大問になっている。関連して、農業、経済政策、国際化などの基礎的な知識から思考力を働かせて考察したり選択・判断したりする力を問うており、適切に知識・技能や思考力等が問われている。

問1 生産統計からタピオカミルクティーの三つの主原料を問う問題。

問2 世界各地の食べ物を日本にいながら食べられるのかについて、その理由を経済政策や技術の進展等から考察する問題。問われている知識は基礎的である。

問3 作物と作物の栽培起源地域について、1人当たり年間供給量と伝播の過程から推察する問題。作物を推察する思考力に加え、栽培起源地域の知識が問われており、良問である。

問4 茶と伝播によって形成された地域独特の食文化に関して考察する問題。

問5 具体例からカリフォルニアロールをイメージするなど、日常生活の中での考察力が問われている。また、下線部の文章が意味する内容を正確に理解できたかという読解力も問われる問題である。

問6 その地域で伝統的に培われてきた農業や食文化の持続可能性について選択するシンプルな問題である。地産地消から穀物メジャーまで幅広い思考力が求められている。すべて実際に行われているが、条件に合わない選択肢を選択する問題。

第3問 南アジアを事例地域として、生活・文化を問う大問である。六つの小問により、知識・思考力・判断力等をバランスよく問えている。

問1 グラフと地図を用い、大インド砂漠があり降水量が少ない州であるという知識から推論させる問題。加えて、その条件で栽培可能な作物を選択する思考力も問えている。

問2 穀物の生産量を増加させた「緑の革命」の概念を、2枚のグラフと会話文から考察させる工夫された問題。学習場面を設定し、会話文により考察の過程を導いている。

問3 小麦粉・羊肉が乾燥地域、香辛料が高温湿潤地域について思考力を働かせて結び付ける問題。使用されている2枚の写真とも、分かりやすく興味を引く。

問4 データから家禽の肉・牛肉・牛乳を判別させる知識と思考力が求められる問題。ヒンドゥー教の禁忌や、いわゆる「白い革命」「ピンクの革命」の概念から考察させる工夫された問題。

問5 南アジアの衣服の特徴から、歴史的背景を踏まえて南アジアの気候や農業について考察する問題。分かりやすい写真が用いられ、工夫された問題。

問6 1人当たり州内総生産を示した地図を用い、産業発展に伴う人口移動のしくみが理解できているかを問う問題。表から読み取った情報と知識を組合せて判断ができるように工夫されている。

第4問 世界の結びつきと地球的課題についての大問である。世界の結びつきについて3問、地球的課題3問で構成されている。

問1 東・東南アジア各国の経済発展に伴い、コンテナ取扱量の中心港が日本・韓国から中国・東南アジアへ移転したことを考察する問題。用いられた地図も適切である。

問2 シンプルな図でありながら、この図からバカンスなどに伴う人の移動や、国家間の地理的距離などに着目して3か国を推察する問題。知識と思考力を適切に問えている。

問3 日本における外国人労働者の流入の特徴について、ブラジル国籍とベトナム国籍の居住者の2006年以降の推移と都道府県別居住地から考察する問題。

問4 地球的課題からエネルギー消費について、先進国、新興国、資源産出国の違いから考察する問題。本問ではさらに先進国間の消費の違いに着目させて、再生可能エネルギーの導入に政策的に力を入れているドイツを判定させる良問である。

問5 様々な環境問題の中から砂漠化を取り上げ、そのメカニズムと影響を示した模式図から、

因果関係を思考力・判断力を働かせて解答する問題。

問6 地球的課題から経済格差の是正の取り組みについて適切なものを選ぶ知識を問う問題。

第5問 京都府北部の宮津市の地域調査に関する大問で「地理B」との共通問題である。

問1 京都府における人口増減率と京都市への通勤率に関する主題図を比較して読み取る技能を問う問題。問2以降の問題を解答するにあたり、京都府全体の中で京都市の持つ影響力を生徒に示唆する意図があると思われるが、解答に当たっては読み取りの技能のみで対応できる。

問2 地理院地図と江戸時代の城下町の絵図を比較して地域の変化を読み取る技能を問う問題。正答である②以外の選択肢は城下町の変容について問う内容となっており、「地理A」では考察が十分にできない生徒もいたのではないかと推察される。

問3 地理院地図の空中写真から撮影地点を判読する問題。

問4 丹後ちりめんの生産地域としての特徴や販売動向を考察し、表現する過程を体験することができる問題。解答の際にはページを戻って図1を参照して季節風の乾湿条件を判断する必要があり、資料の読解とともに複数の資料を活用することも求められている。

問5 人口減少が深刻な地域の調査内容を考察する場面を通して、思考力・判断力を働かせて解答する問題。高等学校の地理の学習で身に付けた知識を活用できるかどうかを問う良問である。

問6 2種類の主題図から読み取れる情報を活用してわが国における外国人観光客の動向を考察する問題。それぞれの地図から正確に表現内容を読み取ることが求められている。

3 分量・程度

第1問 大問全体としては標準的な難易度の設問で構成されているが、問3は複数の資料を用いた読み取りに加え、複雑な思考力が要求されるので時間を要する。また、問4は作図経験の有無によるところが大きいと推察される。分量や文字数は適切である。

第2問 大問全体としては標準的な難易度の設問で構成されているが、問3は栽培起源地域をシンプルに答えるのではなく、作物の特定も必要なために難易度が高い。分量や文字数は適切である。

第3問 大問全体としては、標準的な難易度の設問で構成されている。問4は複数の基礎的知識を必要とし、選択肢が6択であることからやや難易度が高い。一方、問5は選択肢がはっきりしていることから、難易度は低い。また、設問数や分量、文字数ともに、試験時間に照らして適切なものであった。

第4問 複数の地図やグラフなどの読み取りを活用して既存の知識と関連付けて考察することが求められ、全体としてやや難易度が高い出題である。問3は外国人労働者について国籍別に就業内容の特徴まで踏み込んだ知識を求められ、「地理A」としてはやや困難である。分量や文字数は適切である。

第5問 複数の地図や写真を活用しながら地域を総合的に考察し、地理的な見方や考え方に基いて解答する良問が多い。難易度は標準的である。一方で、問4や問5のように一つの問題の資料として示されている文字数が多く、資料の読解に時間を要する問題が増加した。

4 表現・形式

第1問 問3の「高速道路を利用する経路」は高速道路「のみ」の経路という誤解を生む可能性があり、表現の工夫が必要である。配点については他の大問も含め、特に丁寧な資料分析が求められる問題や、難易度の高い問題が高配点となっており、適切である。

第2問 学習場面は高校生の興味を引くものであると同時に、問いの引き出し方や考察や探究の過程は実際の授業でも見習うところが大きいと言え、適切である。

第3問 問2は、高校生と先生が会話をしながら図の分析をするという設定であり、学習場面を想定するという作成方針に沿っている。問3・問5で用いられた写真は分かりやすく、興味を引くものである。また、問1・問2で用いられたグラフも、読み取りやすく適切である。ただし、全体を通して解答形式が組合せに偏っているのは工夫の余地がある。

第4問 問題全体を通じて使用されている図表は題意を読み取りやすく、適切である。問5では、地理的事象の因果関係をとらえる上で模式図を用いて一般化する形式であり、知識を問うのみではなく、思考力・判断力を働かせて考察する学習の場面を設定しており、作成方針に沿っている。

第5問 全体を通して生徒が地域調査する場面を設定しており、その追究の過程は、実際の高等学校の授業等において地域調査を取り上げる際の展開事例として好適である。資料として扱われている地図は、地形図のみではなく絵図や地理院地図、国土数値情報など、コンピュータ上で閲覧することが可能な地図も採用されており、実際の授業におけるこれらの地図の一層の活用を示唆していると思われる。

5 ま と め（総括的な評価）

共通テストに課せられた「知識の理解の質を問う問題や、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題」を重視するという意図が、反映された作問となっている。小問一つ一つに資料や情報が多く盛り込まれるようになった分、小問1問に要する解答時間はセンター試験より伸びているため、全体の設問数は削減されている。平均点からも推測されるように、全体的な難易度は適切であったと思われる。

「地理A」は受験者が少ない上に、幅広い層の受験者が受験するため、問題作成における難易度の調整はかなり難しいと考えられるが、これからも総合的に地理的な見方や考え方を働かせて解く問題や、真摯に学習に向き合った受験者の努力が反映されるような良問の作成が望まれる。

今後のさらなる改善に向けて、引き続き次の3点を踏まえた問題作成をお願いしたい。一つ目は、「地理A」では作業的、体験的な学習を重視し地理的技能を高めることが学習のねらいの一つであることから、細かな知識や概念は避けた問題作成とすること。二つ目は、単調な出題形式を避け、図表の単純な読み取りだけでなく思考を伴う問題となるような工夫や、図表はあるが関連性が薄く選択肢だけで解答できる問題にならない配慮をすること。そして三つ目は、地域調査に関する問題作成では、受験者への平等性の確保の観点から、今後も出題形式の工夫をすることである。

センター試験を引き継いだ共通テストが高等学校現場に与える影響は、これまで以上に大きいといえる。センター試験が回数を重ねる中で、知識偏重から思考力・判断力・表現力等に重点を置いた問題作成となってきたことで、高等学校の授業も知識伝達型の授業から生徒の主体的な学びを促す授業へと変化してきた。本年度の共通テストでは、その傾向はより鮮明になっており、高等学校の授業もなお一層の工夫が求められることになった。さらに、新教育課程において「地理総合」が必修となることを踏まえ、引き続き質の高い出題を期待している。

最後に、共通テスト1年目という難しい年に問題作成に当たられた諸先生方の御努力に深く敬意を表したい。

地 理 B

1 前 文

大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）は、大学（専門職大学、短期大学、専門職短期大学を含む。以下同じ。）への入学志望者を対象に、高等学校（中等教育学校及び特別支援学校高等部を含む。以下同じ）の段階における基礎的な学習の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的としており、この目的自体は、従前の大学入学センター試験（以下「センター試験」という。）と基本的に同様である。

一方、共通テストでは、平成21年告示高等学校学習指導要領（以下「指導要領」という。）において育成することを目指す資質・能力を踏まえ、知識の理解の質を問う問題や、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視して出題することとなっている。地理の問題作成方針にも、思考の過程に重きを置きながら、地域を様々なスケールから捉える問題や、地理的な諸事象に対して知識を基に推論したり、資料を基に検証したりする問題、系統地理と地誌の両分野を関連付けて問題を作成すると示されている。

ここでは、本年度の問題について以下の視点から分析し、上記の共通テストの目的や趣旨が実現されているかどうかについて評価したい。

- ・問題の内容・範囲は適切であったか。
- ・問題の分量・程度は適切であったか。
- ・問題の表現・形式は適切であったか。

2 内 容・範 囲

第1問 Aで世界の気候と自然災害、Bで世界の山地における自然環境などに関して、生徒が探究活動を行う場面を設定した大問。基礎的な知識に基づき資料を読み取る技能や資料を用いた論理的な思考を問う設問で構成されており、知識や思考力、判断力を適切に評価できる出題である。

問1 異なる地点間の気候因子の影響の有無について、気候因子を整理した上で仮想大陸模式図上における等高線などの条件を基に、地点間を相互に比較考察する思考力を問う良問。

問2 生徒の会話文を通して、異なる2地点間の気候の特徴とその背景について考察する問題。

雨温図から気候区を判別する技能や大気大循環に関する理解などが求められる良問である。

問3 探究活動の場面で、気候変動に関連する自然災害の原因を、自然的要因（誘因）と人為的要因（素因）から考察し、さらに、会話文の文章から論理的に思考する力を測る問題。

問4 各大陸の最高峰とその一帯について、比較、整理させる問題。大地形に関する基本知識と、山岳氷河の分布をキリマンジャロ山を基準に緯度・標高から判断する力が求められる。

問5 図と写真の情報から、図中の2地点の標高と植生景観の関係性を読み取る問題。

問6 地球温暖化を原因とした山岳氷河の消失の過程と人間生活への影響に関する問題。資料が示す意味を正確に理解し、氷河融解によって生じる地表水の変化とその利用（影響）を判断する力が求められる良問である。

第2問 産業に関する大問。各種統計資料の読み取りを通して基本的な知識の理解が求められる。地下資源・エネルギー分野が出題されていないなどの偏りはあるが、試行調査の傾向を引き継いだ小問をはじめ、多面的・多角的、総合的に考察させる設問から成り立っている。

問1 小麦の主要輸出国における基本的統計資料の読み取りから、該当する国を特定し、各国の小麦生産の特徴と背景に関する文を組合せて解答する問題。各国の特徴から考察する力が求め

られる。

問2 年次と、漁獲量と養殖業生産量とをそれぞれ特定する問題。中国の経済発展にともなう食料需要の高まりや、東南アジアのエビ養殖などといった地理的な知識から考察する。

問3 試行調査でも扱われた工場立地について、仮想地域における最適な地点を図の情報や条件から判断する問題。難易度自体は標準的だが、情報を一つ一つ丁寧に検証しなければならない。

問4 問3の立地理論を具体的な産業で考察させており、問3の小問と関連性がある。問題作成に新しい試みを感じる。取り上げた食品はいずれも身近で、受験者の生活実感からそれぞれの食品の特徴や地域別立地数などに結びつける地理的な思考力が求められており、良問である。

問5 日系海外現地法人（製造業）の売上高に関するグラフの読み取りと、ASEAN、アメリカ合衆国、中国と日本経済との関わりについての知識を組合せて思考する力を測る問題。

問6 例示資料と比較しながら、商業形態ごとの店舗数割合と立地する地区の特徴を考察する問題。資料は縦横6箇所が隠されており、論理的に考察することが求められる。また、資料中に示されているロードサイドは注釈が付されているものの、受験者がイメージするロードサイドと乖離しており、正答にたどり着きづらいデータ表現となっている。

第3問 都市と人口に関する大問。村落に関する出題を省略し、テーマを絞った出題となっている。統計地図や資料について、読み取りの技能、知識と思考力、判断力がバランスよく問われている。

問1 世界の4地域における人口100万人以上の都市の分布を考察する問題。地図帳を主体的に活用することを示唆している。地形や産業立地などの知識を基にした思考力が求められる。

問2 国別、各国人口第1位都市別の年齢別人口構成の図を読み取り、地理的な知識を基に多面的・多角的に考察する問題。各国の特徴や都市の機能などの理解が求められる。

問3 インド系住民の世界的な広がりや移住先の国籍保有率の図を読み取り、移住の時期や移動先、理由などについて考察する問題。

問4 東京都内3地域の人口増加率の変化と、各地域の特徴から傾向を考察する問題。各地域における、ドーナツ化現象や都心回帰などの地理的事象の影響を考察する力が問われている。

問5 日本の3市区町村の居住者のいない住宅の割合及びその内訳を示す統計と、各地域に関する説明文を組合せて考察し、特定する思考力が求められる。

問6 タイペイ市に関する二つの図を読み取り、関連する文章中の下線部の正誤を判断する問題。問題文、図、文章を丁寧に読み解くことが求められる。

第4問 アメリカ合衆国の地誌に関する大問。多様な資料を読み取る技能と、基本的な地理の知識を基に、時事問題に触れつつ理解力、思考力、判断力が適切に問われている。

問1 1950年から2010年の間の人口重心を判断させる問題。(1)と(2)が相互に関連し、地理的事象と要因について問われており、4点問題を二つに分割した構造になっている。アメリカ合衆国の歴史を1950年から現在にいたるまで俯瞰し、その発展の歴史を人口移動と結びつけて多面的・多角的に考察させ、論理的な思考力を問う良問である。

問2 アメリカ合衆国の3州を取り上げて、その取水量の水源別割合と使用目的別割合の表を読み取り、それぞれの州の自然、産業などの知識を基に、総合的に考察する良問。

問3 アメリカ合衆国の二つの州の気候と農業の関連を多面的・多角的に考察させる問題。センター試験では比較地誌に関する大問が出題されていたが、広大な国土であるアメリカ合衆国の二つの州を扱うことで、この小問に比較地誌的な性格を持たせている。

問4 州全体と各州人口最大都市の人種・民族構成について比較、検討する問題。この小問も比較地誌的な出題。二つの州の特性を考慮しつつ、人種や民族の分布の特徴から考察する。

問5 アメリカ合衆国の各州の都市人口率を示す図を手がかりに、他の三つの指標を判断する問

題。各指標の意味や背景, 特徴を理解し, 関連性を見出す論理的な思考力が求められる。

問6 過去のアメリカ大統領選挙の結果について示した主題図を読み取り, その背景について述べた文章の空欄を補充する問題。各地域が抱える実態と選挙結果の関係性を考察する。

第5問 宮津市を中心とする京都府北部の地域調査に関する大問。「地理A」との共通問題。統計地図, 地理院地図, 絵図など数種類の地図を用いることで, 様々な読み取りの技能を測れている。また, 地理的な見方や考え方を働かせた思考力, 判断力を測る問題が作成されている。

問1 京都府各市町村に関する二つの主題図から地域性や京都市との関連などを読み取る問題。

問2 宮津市中心部の地理院地図と絵図の読み取り問題。新旧地形図の比較ではない点で新鮮味がある。二つの地図に示された地図情報を比較, 検討する力が求められる。

問3 天橋立周辺の景観写真の撮影地点を判断, 特定する問題。

問4 丹後ちりめんについての調べ学習の成果を問う場面を設定している。学習の成果をまとめた文章から, 季節風や織物業に関する地理的な知識とその背景について考察する問題。

問5 宮津市北部の山間部にある集落での調査結果をまとめた資料から, 考察した内容の正誤を判断させる問題。結果と考察に関する資料の読解力と思考力が求められる。

問6 日本の外国人観光客の動向を示す二つの統計地図の読み取りと, その背景について述べた文章中の空欄を補充する問題。地方で外国人観光客が増加している背景を考察する。

3 分量・程度

第1問 全体としては標準的な難易度の大問となっているが, 設問によってはやや難しいものもみられた。問2は, 世界地図を用いずに空間的な位置関係と気候に関する地理的な事象を結び付ける必要がある点で, 解答に苦慮する受験者も多かったと考えられる。6問中3問に会話文が用いられており, 全体的に文字数はやや多く, 解答には時間がかかる。

第2問 全体としては標準的な難易度にまとまっているが, 設問によって難易の差が大きい大問である。問6は, 大都市圏と地方圏の生活感覚の違いなど, 判断に迷う要素が多い難問であり, 解答にたどり着けなかった受験者も多かったと推察できる。一方, 問3は落ち着いて資料を読み込むことで確実に解答することができ, やや易しい問題であった。設問数, 文字数ともに適切である。

第3問 標準的な難易度の設問で構成されているが, 問4は資料が戦前からの比較となっており, 日本の都市拡大について戦後の比較のみで学習していると, やや判断に迷う。また, 問5は日常生活感覚からイメージできる易しい問題であった。設問数, 文字数ともに適切である。

第4問 初見の資料が多いが, それらが教科書の学習で得た知識を活かす適切な判断材料となっており, 解答しやすい適切な難易度の設問で構成されている。問5は統計地図として見慣れない指標が扱われ, やや難問であった。設問数, 文字数ともに適切である。

第5問 比較的読み取りやすい資料が提示されており, やや易しい設問で構成されている。地域調査という設定上やむを得ないが, 文字による資料が多いため, 解答にはやや時間を要する。設問数は適切である。

4 表現・形式

第1問 自然環境に関する諸事象について, 与えられた資料に基づき探究的に学習する場面が設定されている。実際の高等学校における授業の好例となる, 適切な場面設定である。また, Google Earthにより作成された図が使用されるなど, WEBなどで提供される様々な地図の有用性が効果的に示されており, 今後も活用されることを期待する。配点については他の大問も含め, 特に丁寧

な資料分析が求められる問題や、難易度の高い問題が高配点となっており、適切である。

第2問 独立した設問で構成されているが、問3で概念図から理論を考えさせ、問4で現実社会の事象について問う形式は新しい傾向であり、実際の学習過程が十分に意識され、「学び方」が解答に活かされる形式である。

第3問 テーマに応じてそれぞれ独立した設問で構成されているが、世界全体から国単位、都市圏単位、都市単位のように、大問の中でスケールを変えながら思考力・判断力を問う構成となっており、大問としてまとまりがある。

第4問 アメリカ合衆国という多様性に富む国を対象とし、地誌的学習に求められる、諸事象を関連づける視点や、地域間を比較して考察する視点から、思考力・判断力を働かせながら解答することができる設問構成となっている。

第5問 京都府宮津市における地域調査を切り口とし、自然、歴史、産業に関して、生徒が入手できる資料を基に考察する場面設定は、作成方針にも合致し適切である。実際の高等学校の授業での実現可能性を考慮すると、例えば「宮津市の高校に通う高校生が地元の地域調査を行う」といった場面設定の方が、より現実味がある。また、古地図（絵図）が用いられている点について、地域調査を題材にする上で有意義であるが、高等学校の授業では教員の知識や技量により扱える資料の内容に差異があるため、試験問題としては今回のように確実に読み取れる内容を出题するなど、取り扱いには注意を払っていただきたい。

5 ま と め（総括的な評価）

問題内容・範囲については、系統地理の各分野についてバランス良く出題され、地誌を除いた出題地域にも偏りはみられない。理論的な問題と連続して理論を応用させた問題、分野横断的な問題、時事的な問題など、さまざまな工夫が施された出題である。比較地誌の大問がなくなったことについては、比較地誌の観点からの出題もあるが、地誌の出題数や配点が減少したことは事実である。教科書の分量や地誌分野の学習量から鑑みて、他の大問中に地誌の内容を含む問題を組み込むなど、出題数等についての検討が望まれる。

分量については、文字数、資料とも豊富であり、初見で複雑な構成の資料も多いため、資料読解や因果関係の把握・考察にかなり時間を要したと思われ、表現などの工夫が求められる。難易度については、おおむね高等学校で学習した知識、技能、地理的な思考力等を問う問題で適切である。ただし、標準偏差は小さく、地理では高得点が取りにくいという課題が解消されていない。学力の識別性を高めるためにも、今後の問題作成において十分に意識していただきたい。

問題の表現・出題形式については、情報が読み取りにくい資料や、資料の扱い方に改善が必要な問題もみられるが、多様な資料が効果的に用いられ、センター試験と比べて、格段に読解力や思考力を発揮して判断、推論する力を求める出題形式となっている。二つの大問は、授業や探究活動の場面という設定のもと、段階的に学習を深めていくという学習の過程を意識した出題形式である。これらは、高等学校の授業において、資料を基に因果関係や相互関係を問いかけながら、主体的・能動的に学習を進めることを促すメッセージ性も有している。

全体として、問題作成の基本的な考え方及び地理の問題作成方針に沿った良問が多く出題され、高等学校での学習の成果を測り、大学教育の基礎力となる能力を把握できる試験である。

第2 教育研究団体の意見・評価

①日本地理教育学会

(代表者 井田 仁康 会員数 約500人)

T E L 042-329-7729

地 理 A

1 前 文

大学入試センターから共通テスト問題作成方針（2020年1月）が出されている。この中から、特徴的な方針を取りあげると、全体では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のメッセージ性、「授業において生徒が学習する場面」、「社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面」（中略）など学習過程を意識した場面設定を重視することが挙げられる。

また、地理の問題作成方針では、「多面的・多角的に考察する過程を重視する」というように「多面的・多角的」という文言が複数回使われていることが注目される。具体的な作成方針では、①思考の過程、②様々なスケールから捉える、③知識をもとに推論、④資料をもとに検証などがあげられている。今回は上記の観点を検討し、センター試験と比べてどのような点で変化がみられたのか、などを中心に評価する。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 この大問ではこれまで地理の基礎的事項を問うてきた。どちらかというとなら自然地理をベースにした設問が多かった。今回は、「地図とGIS」を全面に押し出した大問となった。地理院地図、地理院地図の機能、汎用地図サイトの機能、国勢調査データや国土数値情報の利用など「地図とGIS」に関する基本が網羅されている。また、問6は大問のまとめとなる設問で、一貫性のある構成となっている。大問全体としても良問である。この大問は「地図とGIS」の学習の流れを想定したもので、次期学習指導要領「地理総合」の先取りを意識したものといえる。地理Aの選択者は少なく、わずかな受験者の目にしか触れられていない点が残念である。

問1 新旧地形図の対応による変化を読み取る問題である。示されている4つの場所それぞれ典型的な変化を示しており、この狭い範囲の中でこれらが見事に示されていることに図どりの素晴らしさを感じる出題である。良問である。

問2 自然堤防は等高線間隔10m（補助曲線でも5m間隔程度）の1:25000の地形図のほとんど表現できないような微高地であるが、地理院地図に装備されている断面図作成機能を使うと表現が可能である。地理院地図では、地形図を越えた新たな知見が得られる。本問は、このような知見を地理学習の中で扱うことを促進することにもなる。良問である。

問3 汎用地図サイトが提供している経路検索機能を使っての出題である。地図学習をより充実したものにする点では、日常的・実用的な地図利用という考え方は重要であり、ユビキタスマッピングの時代においては、このような出題は大いに意義がある。交通機関の比較に適した場所（大垣市、岐阜市、一宮市周辺）を選定しており、背景地図に示されている事象（市街地、交通路、河川）も適切で、また地図の表現方法も程よく見やすい。統計データも適切であり、交通機関の特性を考えさせることを十分に可能にしている見事な作問である。

問4 国勢調査データを利用し、統計の基本的な地図表現を示し、その中でも最も多用される

コロプレスマップの最重要留意点を問う出題となっている。紙地図教材やGISソフトウェアを使って行われる統計地図作成の地図作業学習を念頭においた出題ともみることできる。良問である。

問5 国土数値情報や基盤地図情報などを利用して災害関係情報について作成した地図に関する出題である。混乱気味のハザードマップについて整理された概念（土地の成り立ちを示した地図、災害の発生しやすさ示した地図、災害を予測した地図、災害後の避難・救援のための地図）に基づく出題となっている。また、GISの観点からは事象の重ね合わせ（レイヤリング）を行い、ここからの読図を行わせるという出題となっている。良問である。

問6 前述の問1から問5の一連の出題のまとめという意義を持たせた出題となっている。文章の正誤を問う比較的単純な選択肢の形式の出題方法ではあるが、このような意義をもたせての配置は効果的である。

第2問 世界の食文化に関する大問。ストーリーを立てて問を設定していることは、今後の授業のあり方を考える上で示唆的である。また、グラフや統計資料、写真を用い、多面的に地理的事象を読み取らせようとする一連の構成は評価できる。知識を問う設問も一定数あり、バランスもよい。ただ、一部の設問に資料の扱い方や問の在り方に改善が求められるものがみられた。容易な問題が多いが、全体としてのバランスからは適切であろう。

問1 流行の食文化を設問に取り入れて目新しさを出したものと思われる。資料のタピオカミルクティーの説明文は、ストーリー展開上必要のものではあるが、受験者は出題者の意図とはかかわらず、説明文を読まずに解答したのではないか。改善が必要かもしれない。

問2 原産地表示と「安価な」の関連がないということから判断。日本語が読めているかどうかの問題であり、地理の力を測る問題としてはやや疑問である。

問3 伝播の過程はやや細かい知識だが、歴史的過程も踏まえており評価できる。各作物の1人当たり年間供給量は違いがはっきりしており、判別しやすい。

問4 写真を用いた設問形式ではあるが、写真だけではカとキの違いがつかみにくい。多くの生徒はキャプションを読んで解答したのではないだろうか。キャプションがなくても解答できるような写真にしてほしい。

問5 グローバリゼーションとローカライゼーションの問題。設問にあたっての工夫がみられるが、解答は平易。aは文脈からタしか該当しないし、bもさまざまな変わり種の寿司が人気になっていることがメディア等でも紹介されている。

問6 第2問全体としてのストーリーを考えての出題である。解答は平易。

第3問 南アジアに関する問題である。写真や地図、グラフといった資料を活用している。小問ごとに独立した出題で、気候と農業、農業生産の変化、食文化、衣文化、社会問題についての基本的な内容を幅広く問うている。

問1 気候と農業を関連させた問題。人間生活と自然環境とのかかわりを問うており、基本的なレベルであるが良問といえよう。

問2 グラフの読み取り問題。キについては単に読み取るだけでなく、思考力を問うように工夫されている。良問といえよう。

問3 写真を基にした問題であるが、写真をみなくても解答可能。逆に言えば写真だけでは何を写っているのか判別することが難しい。工夫が必要。内容は常識的レベル。

問4 インドの農業についての学習では、「白い革命」や「ピンク革命」は基本的事項である。言葉で問うのではなく、表から読み取らせるところに工夫がなされている。良問といえる。

問5 写真を基にした問題。衣装は色彩も重要な意味を持つのでカラーで出題されることを望

む。内容は歴史的背景などのかかわりも述べられており望ましい。

問6 地図と表を読み取り、文章の正誤を判断する問題。①については資料がないので知識で判断するものであるが、②～③は資料の読み取りとそこから推論されることが問われており、工夫されている。良問といえる。

第4問 地球的諸課題に関する問題。地図やグラフを活用した出題で、近年の経済活動の様子・変化を交えつつ基本的な知識を幅広く問う出題である。大問全体としてのレベルは標準である。

問1 コンテナ貨物取扱量から物流の変化を問うている。中国経済の成長を踏まえ、中国の港の台頭を把握できれば解答可能。基本的なレベルの問題だが、1～5位と6～10位を考えさせる図であり、よく練られた問いである。

問2 OD図を用いた旅行客数とその移動に関する問題。歴史的背景や観光活動(バカンス)を把握していれば解答できる。標準的なレベルの問題。大学入試センター試験から踏襲されている出題形式だが、新しい出題方法も検討してもよいと考える。

問3 在留ブラジル人と在留ベトナム人の居住者数・居住地に関する問題。1990年代の日系ブラジル人流入、および自動車工業への従事を踏まえても解けるが、近年の技能実習制度や留学などの時事的な内容をニュースで触れている受験者にとっては解きやすかったと思われる。標準的なレベルの問題。

問4 1次エネルギー消費量と都市人口率の変化に関する問題。早くから都市人口率が高いこと、環境問題への意識から近年になりエネルギー消費量が減っていることを踏まえれば容易に解答可能。基本的なレベルの問題。ただし、風力も1次エネルギーに入ることから、風力発電の盛んなドイツが含まれる本問では、横軸は「1人あたり化石燃料消費量」で設定することがより適切であると思われる。

問5 砂漠化の模式図の空欄補充の問題。矢印の前後の流れを踏まえることで解くことができる基本的なレベルの問題。共通テスト(2)「地理A」の第4問 問5でも同様の出題形式がみられ、今後の大学入学共通テストの傾向となるのだろうか。模式図全体を活用するほか、探究学習の位置づけとするなど、出題方法にもう一工夫欲しい。

問6 先進国と発展途上国との経済格差是正に関する問い。文章の正誤問題で、常識的レベルの問題。出題方法にもう一工夫欲しいが、大問全体のバランスを考慮すると、適切である。

第5問 京都府宮津市とその周辺に関する地域調査の問題である。新旧地図比較、統計データを活用した資料の読み取り、写真撮影位置の特定など、従来の出題傾向を踏襲した問題構成となっている。一部の設問では、2段階で解答を導かせるものもあった。いずれの問題も、基本的な知識・技能を問う設問であり、難易度は標準的である。

問1 京都府内の市町村における人口増減率と京都市への通勤率を示した図をもとに、各市町村の特徴を判定する問題。京都市との関係だけでなく、大阪や奈良などを含めた都市圏で考える必要はあるものの、問題の難易度は標準的である。

問2 現在の地形図と江戸時代の絵図を比較しながら正誤判定をする問題。地名や地図記号などをたよりに、各選択肢を丁寧に読み解いていけば、正解に導けた。難易度は平易であった。

問3 日本三景のひとつである天橋立を撮影した位置を判定する問題。入試直前に、TV番組で同じ場所の景観が紹介されたことからインターネットなどで話題となった。しばしば出題されている形式だが、教室での学習を現実社会に生かしていくという観点から意義のある出題だといえる。番組を見たか見なかったかにかかわらず、地理院地図をもとに、天橋立周辺の地形の特徴をみれば解答できる。正解の判定に大きな影響はないものの、選択肢の写真において明瞭さに欠ける点については改善を望む。

問4 丹後ちりめんの特徴と動向について書かれた資料の空欄に適語を入れる問題。日本海側の気候の特徴や、伝統工芸品の現状を把握していれば、選択肢を絞ることができた。標準的な問題である。

問5 宮津市の山間部で実施した集落調査の結果から、正しい考察を読み取る問題。提示された結果と選択肢の考察が対応しており、結果を丁寧に読めば、正解は平易である。平易な問題といえる。

問6 外国人観光客の都道府県別の動向の変化を読み取り、空欄を補充する問題。共通テストになり、新たに出題されることになった出題形式のひとつで、空欄補充したのち、それに関する特徴を組み合わせる問題。図を参考にすれば、解答は平易であるが、多角的な要素を組み合わせる出題形式は今後、標準的なかたちになるかも知れない。

3 ま と め

「場面設定」や「主体的・対話的で深い学び…」に関して、第2問を例にみていきたい。この大問全体で「なぜ私たちは世界の様々なものを食べたり飲んだりできるのか」という問から始まっており、高校授業においても、このような探究活動に向かって欲しいというメッセージと考えられる。発せられた問は、現状の把握(問1・2)、栽培起源(問3)、伝播(問4)と流れ、グローバルとローカルの問題に行き着く(問5)、最後は持続可能な発展(問6)で結んでいる。大問全体を見ると、解答に必要な資料もあるが、ストーリーの小道具として必要であったと評価している。また多くの情報から必要な情報を選び取るスキルを評価しているのかもしれない。ただし、いくつかの課題もある。

図表が多くなると、単純な情報処理力を問う問題が中心になりかねない。また、場面設定をしたことで、常識や文脈で判断できてしまう問いも散見される。つまり地理的な見方・考え方を問うよりも国語力に寄っていく心配がある。言語リテラシーが重要であることは当然のことであり、それを問うこと自体には異論はない。難しい注文になるが、言語リテラシーと地理的見方・考え方とのバランスがとれた出題を検討する必要があるだろう。

全体として、問題総数は34問から30問に減少している。これは、より深い地理的思考力や資料を読み取る出題が増えたことと対応している。一方で、試行問題でみられたような根拠となる資料を問うものや、仮説をたずねる問題は少なかったことがやや気になるところである。とはいえ第1回の共通テスト(1)「地理A」は妥当なものであったと評価できる。

地 理 B

1 前 文

全体的に“思考”を問う出題と評されている。では“思考”を問うとはどのようなものであろうか。今回も、地理の問題の特徴である地図、グラフ、表、写真を今回も50枚以上も使うことで、すでに十分に“思考”を問う出題となっているが、さらに、これを進めていくに際して大きく二つの特徴がみられた。一つは解答の形式である。従前から形式的にはいわゆる組み合わせ的な出題がされており、解答するにあたって複数のステップを経て解答することが要求される問題として出題されている。例えば対比的な二つの選択肢を三つ組み合わせると8通りの選択肢を作り完全解答を要求する方法が見られた。(第5問 問4)。ただ、この方法は“思考”の段階を増やすというよりも、複数の単純な選択問題をひとまとめに出題するということのほうが主眼であると思われる。従前から行われてきた、三つの事象を並び替え六つの選択肢として解答させる方法では、従前は具体的知識に対して概念的知識をそれぞれに当てはめる形式であったが、概念的知識を別の概念的知識に当てはめる形式で解答を求め、解答プロセスの中で、これらの概念的知識間を繋ぐために具体的知識が使われるといった形の出題が現れた(第2問 問4, 第3問 問5)。この出題形式は解答に際して概念的知識間に具体的知識を介在させることが要求されており、思考ステップをもう一つ加えるようになっている。また、この変形として三つの選択肢と二つの選択肢を組み合わせると6通りの選択肢を作りその中から一つを選ばせる方法も見られた。この形式で完答を要求するには12通りの選択肢が必要であるが、完答は要求せず部分解答、つまり、三つの選択肢の部分すべて解答させないで、一つを選ぶだけで正答とする方法である(第2問 問6, 第3問 問2)。これらの問題は扱う内容ともからめてフィールドワークに基づく野外科学らしい出題となっている。もう一つは地理学の理論に基づき解答する出題である。古典的ともいえるような理論であるが、理論によって現代の事象をわかりやすく理解することができる。ここで扱われていたのは工業立地論である。(第2問 問4)。地理Bらしい出題といえる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 これまでの出題では、冒頭に世界地図を示し全体をリードする大問構成が多かったが、本年度は傾向が異なっている。A・Bの2大問からなり、問1では仮想大陸を用いた気候問題であった。共通テストの第1回目の第1問冒頭に置かれている点から、新しい学力観についてのメッセージが含まれているようにも思われる。単純な知識を問うものは少なく、考えさせる良問が多くみられた。

問1 気候について仮想大陸を示し、隔海度の影響が現れる地点を問う問題。共通テストに変わることを意識した出題と思われる。気候因子に関する原理的理解を総合的にたずねており、良問と判断する。

問2 雨温図と大気循環の会話を示し、大気の大循環を問うている。大気の大循環の正確な理解が必要で、知識だけでは解けない問題であり、良問である。

問3 自然災害を「災害のきっかけ」と「災害に対する弱さ」とに分けて考察させる出題。被害は「ハザード」と「脆弱性」に分けて考える近年の学問の流れを踏まえている。解答は言語的能力による部分も強く、地理の問題としては今後の課題であろう。

問4 変動帯に位置している山数と氷河が分布している山数をたずねた問題。知識に関する出題である。「変動帯」という用語については、高校地理分野では近年扱われるようになった用

語で、未だ教科書や副読本の中には掲載されていないものもみられる。この出題を機会に自然地理分野においても学問の進展に応じた教授が普及することを期待したい。氷河についての出題では、緯度と標高からオーストラリアに氷河がないと導くのであろうが疑問が残った。

問5 写真と生徒の発言とから、正誤を判定する問題。内容は平易だが「すべて選べ」とあるので、難しく感じたかもしれない。この問いにおいて写真の持つ意味は大きい。より鮮明な写真で出題することを望みたい。

問6 氷河縮小時期における流出量の季節変化を考えさせる問題。氷河縮小という長期間の現象が1年のスパンでどう「見える」かを考えさせるものである。自然現象の動的な見方を問うており、良問である。

第2問 産業に関する問題。第一次産業、第二次産業、第三次産業について、表や図・グラフを活用して幅広く内容を問うている。地図やグラフを活用した出題で、近年の経済活動の様子・変化を交えつつ、基本的な知識を幅広く問う問題である。大問全体としてのレベルは標準である。

問1 小麦の主要産出国に関して、生産量や土地生産性、耕地割合から推定し、それらの国々の背景を選ぶ問題。いずれの背景も教科書で扱われる内容であり、標準的なレベルの問題。

問2 世界の漁獲量と養殖業生産量の内訳と変化を問う問題。中国の台頭、東南アジアのエビの養殖量増大を踏まえれば容易に解答可能。ただし、本問の漁獲量には養殖業生産量を含まないとされている点が、図の円グラフを読み取る際にわずらわしい面でもある。養殖業が漁獲量のうちどれくらいを占めるかという割合にするのが、一般的ではないかと思われる。

問3 ウェーバーの工業立地論に基づく仮想モデルを理解し、工場立地を判定する問題。共通テスト(2)「地理B」の第2問 問2と同様に、理論的内容の理解を問う問題で「地理B」らしい問題。条件を読むことで重量減損型工業と判断する。内容の基礎・基本の習得度を測る良問で、基本的なレベルの問題である。

問4 問3を踏まえた上で、理論を活用した問題。牛乳、バター、アイスクリームの特徴を踏まえて、原料地と消費地を推定する問題。表の東北の事項がなくても解答できる。多くの情報の中から適した情報を選択する技能を問うためあえて入れたのだろう。また、バター・牛乳など当てはめなくても、文章と表の組合せで解ける形式になっている。その良し悪しは検討する必要がある。今回は輸送費に着目した文章だが、新鮮度に関しての内容も生乳を判定する上であったほうが丁寧であると思われる。標準的なレベルの問題である。

問5 製造業の売上高の構成比の推移を問う問題。ASEANおよび中国の成長を踏まえれば、容易に解ける。基本的なレベルの問題である。

問6 店舗形態と立地に関する問題。従前からある3つの組み合わせによる6択ではなく、そのうちの1項目を選ぶとともに、グラフの凡例も選択させる形式。この形式は共通テスト(1)「地理B」第3問 問2や共通テスト(2)「地理B」第2問 問6でも見られる新しい出題方法であり、今後の大学入学共通テストの傾向となるのだろうか。小売合計を見ると鍵となるが、地方や郊外ではコンビニもロードサイド立地が多いので判別が難しいかもしれない。難しい。

第3問 従前の第3問を継承した大問である。題材、内容などはほぼ変わらないが、一部に新しい出題形式がみられ、より複数の思考のステップを必要とするような形式となっており、今回からの大学入試共通テストの方向性を意識した出題でとなっている。

問1 エクメーネ・アネクメーネを想起させる問題、海岸線・山麓線・河川沿いなど一般的な都市立地の条件を想定させる問題、また、単に人口が多い地域と言うことで中国・インドに

目が行くので人口分布の問題ともいえる。つまりいろいろな観点で解ける大観的な思考を問う出題である。センター試験でも過去に出題されている形式の問いかけであり、良問である。

問2 前文で述べた出題方法を用いている。スケールを変えての年齢別人口構成をまとめて捉える問題となっている。国全体か首位都市かの判断の方が難しいが、一般に大都市の方が生産年齢人口が多いことで判断できる。発展途上国で首位都市卓越型のケニアは都市への人口流入が著しい。移民の国オーストラリアは高齢化の進展はそれほどではない。いずれでもない韓国は少子高齢化が進んでいる。どの国を選ばせても同等レベルの解答は期待できる。良問である。

問3 統計地図の読み取りを行う出題であり、四つの説明文からなる選択肢から適切なものを一つ選ぶという最もシンプルな形態である。一時的な移民か、永続的な移住かで判断する。基本的なレベルの問題である。

問4 バブル期の郊外化、近年の都心回帰という大都市圏の人口動態の基本パターンを問う出題。問いかける内容は過去のセンター試験でも扱われてきたものであり、ここでは空間的分布と統計数値を結びつけることを求めている。統計、そして、地図に記されている事象やおよびその表現方法も適切であり、良問である。東京在住の生徒がやや有利かもしれないが、東京駅の位置や1925年の人口密集地が示されるなど地方の生徒への配慮もある。

問5 前文に述べた出題方法を用いている。関東周辺で考えると軽井沢や伊豆のような観光地、矢板市や渋川市・笠間市のような過疎地を抱える地方都市、八千代市・所沢市・小金井市など大都市近郊の都市を具体的に想起しながら当てはめていく。よく練られた良問である。

問6 海外の都市の道路地図を題材にした出題。こうした見慣れない地図を使うことによって、既存の内容知を使わずに方法知を駆使させる出題となる。難しくはないが、丁寧に読み取ることが必要である。このような出題をすることで、インターネットを通じて可能となってきた海外の大縮尺地図(例えば、各国の官製web地図サイト)の地理学習への活用が促進されるであろう。良問である。

第4問 アメリカ合衆国に関する大問。統計資料、グラフ、分布図などを多用し、多面的に地理的事象を読み取らせようとする姿勢は評価できる。

問1 人口移動に関する問題。伝統的な西への動きとサンベルトへの移動といった知識があれば解答は難しくない。(2)は、(1)を踏まえて解答する新しい形式の問題。明らかに時代が異なる③を除けば、(1)の限定がなければ誤りといいにくい。レベルとしては標準的である。

問2 各州の自然環境の違いに加え、産業構造や人口分布の理解をふまえた、地理的思考力を試す良問といえる。

問3 気候環境と農業との関係を問うている。ハイサーグラフも取り上げられている農産物も典型的であり、基礎的レベルの問題である。

問4 アメリカの人口分布を州スケールと都市スケールの違いにも焦点を当てて出題している。まず、太平洋岸の州と比較して北東部諸州でアジア系人口が少ないことから①と③に絞り込む。また、北部の工業都市には南部から黒人が移動したため、アフリカ系が多くなる傾向にある。いずれも教科書に記載される基礎的な事項であるが、複数の知識を組み合わせ出題しているのでやや難しい。

問5 都市人口率が示されているところに出题者の配慮が感じられる。持ち家率と外国生まれの人口の割合は都市人口率との対比で考えて判別する。貧困水準以下の収入の人口の割合は人種・民族間の所得格差が大きいという課題が理解できていれば判別できる。

問6 時事的な要素を問う設問である。アメリカ大統領選挙について、背景となる地理的状況

の理解を求めている。日本のメディアでも盛んに報道されていることから解答は難しくないであろう。日ごろの学習が現実の社会とつながっていることを示すという点で好感が持てる。第5問「地理A」と共通問題、詳細は「地理A」を参照。

3 ま と め

全体の構成は大問は6から5に減った。減った部分は地誌的な大問である。思考問題の割合を増やすことにつながるが、逆に残った地誌1問がとても目立ってしまう。つまり、ここではアメリカのみが地誌と捉えられてしまい、その偏りが際立ってしまった。地誌1問となると出題の考え方を変える必要があるのかもしれない。日本については地域調査の問題として出題されているが、今回であれば、それが京都に偏っていると思われることはない。となると、外国も同様、その対象地域に偏っているというように思わせないような出題が望まれる。そのためには、外国地誌を日本の地域調査のような方法の出題が一つの参考になるのかもしれない。このほか、第2問が統計重視から変化しており、従前の第3問的な様相を帯び、さらに第5問の地域調査にも従前の第3問的な様相が入ってきており、地理的な見方・考え方がより要求されるようになっている。

今回、「地理A」が次期学習指導要領の「地理総合」の内容を意識したものになっているのに対して、「地理B」は内容的には従前のセンター試験のものからは大きな変化はない。15万人の受験者があつた「地理B」では、無難にまとめたといえよう。一方、問題の質に関しては、新しい共通テストの姿を模索したものとなっている。“考える問題”が殆どであり、すべての問題が数段階の思考ステップを経て解く問題となっている。暗記していたことを即答という問題はほぼ完全に姿を消した。細かい知識を暗記しなくても、地理における論理的な思考ができれば解ける問題となっている。逆に言えば論理的な思考ができないと解答はできない。それはそれで厳しい。暗記知識を使わないため正答率が低い問題が作りにくい。難問とされる出題は判断がつきにくいものとなりがちであり、それは、時には問題としての成立にもかかわってしまう。いくつかの課題もあるが、地理学・地理教育はそれらを解決するに十分な力を備えている。すでに相当な工夫がなされ非常に練られた良問ぞろいの出題であるが、更に工夫された出題を期待せずにはいられない。

② 全国地理教育研究会

(代表者 高橋 基之 会員数 約300人)

TEL 03-3946-9668

地理A・地理B

1 前 文

全国地理教育研究会は、主に全国の高等学校で実際に地理を担当している教師を中心として構成された研究組織で、会員は年1回の研究大会と年2回の会報の発行を軸に研鑽を重ねている。それだけに、大学入試センター試験（以下「センター試験」という）に代わり実施された大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という）の問題には強い関心を持っており、毎年のセンター試験実施後に引き続き、本年も共通テストについての検討会を設け、さまざまな角度から意見交換を行った。

今年度は、共通テストへ移行して初めての出題であったが、学習指導要領そのものに変更はなく、「地理A」の大問数や構成は、センター試験とほぼ変わらなかった。また、「地理B」では、大問数が減少し比較地誌の大問は設けられなかったが、こうした構成は2回にわたって行われた試行調査と同様のものであった。また、学習の過程を意識した場面を設定した大問の出題もみられ、こうした点も試行調査と同様であった。小問では、知識理解をもとに思考力や判断力を用いて解答することを求められるものが多く出題されたこと、組合せ選択の形式のものが大きく増加したこと、などが目立った。こうした点に注目しながら、以下に本会の意見・評価を述べていきたい。

2 試験問題の程度・設問数・形式等

(1) 試験問題の程度について

今年度の共通テストの平均点は、「地理A」で59.98点（前年度センター試験との比較で+5.47点）、「地理B」で60.06点（同-6.29点）となり、「地理A」では小問2問程度の易化、反対に「地理B」では小問2問程度の難化となった。全体として、これまでのセンター試験同様に、高等学校までの学習内容に概ね沿った小問が圧倒的に多く、学習範囲を逸脱した難問や奇問はほとんどみられなかった。高く評価したい。

「地理A」では、資料が豊富に示され、その中でも複数の資料を照らし合わせるなどして解答に時間を要する小問が多く、組合せ選択による小問が大幅に増加した。しかし、資料に丁寧に向き合えば、問われている内容そのものは標準的なものが多かったため、昨年度のセンター試験よりも易化したものと考えられる。しかし中には、高い知識レベルを必要とする小問も見受けられた。「地理A」では、知識の有無に特化せず、資料の読み取りや活用、思考・判断をとまなう問の数を増やすような作問を引き続き求めたい。そのためには、いたずらに資料の提示数を増やすのではなく、資料数を吟味し、場合によっては解答数を減少させるなどして、解答時間にゆとりを持たせた上で、じっくりと問題に向き合うような作問をお願いしたい。

「地理B」については、「地理A」と同様に、文章量や使用する資料は多かったものの、試行調査に比べると精選された印象である。しかし、高得点者の割合が、地歴3科目で比較すると圧倒的に少ない点は、課題のままである。今年度は特に、「地理B」の平均点そのものが「世界史B」や「日本史B」と比べて低く、「地理B」では高得点を望めないとの例年の声は、今年度も多く聞かれた。「地理B」では、一定の知識レベルが要求される中で、提示された初見の図表や地図、設問文などを通して思考・判断を要する小問が多い。そのため、「世界史B」や「日本史B」のよう

に短時間で解答にたどり着けるような小問が極めて少なく、解答に際して多くの時間をかけて考えることになる。その上で、複数の資料について検討し解答する組合せ選択の小問が多い。こうしたことが、高得点者の少ない要因であることは、昨年度までのセンター試験においても、指摘し続けてきた点である。来年度以降は、「地理B」を学習した生徒が、しっかり学習をすれば満点に近い得点がとれるような問題作りを切に願うものである。

(2) 設問数や大問の構成、形式について

大問数は「地理A」が5問で変更はなかったが、「地理B」も5問となり昨年度までの6問から変更された。また、小問数は「地理A」で30問、「地理B」で一つの小問を二つに分割したものを含め32問といずれも減少した。大問ごとの小問は、「地理A」・「地理B」ともにすべて6問ずつとなった。小問数の減少を受けて、各小問は3点を基準としながらも4点が配点された小問が増加し、「地理B」では一つの小問を2点ずつに分けて配点するものもみられた。小問数が減少したものの、「地理A」・「地理B」ともに地図、グラフ、表、写真などの資料が多く、時間はぎりぎりで見直す余裕はなかった。小問数のさらなる削減を要望したいが、少なくとも今年度の小問数を維持していただきたい。

大問の構成では、「地理A」第1問で大問のタイトルが、これまでの「地理の基礎的事項および日本の自然環境と防災」から「現代社会における地図と地理情報の活用」に変更された。また、「地理B」では試行調査と同じく「比較地誌」の大問が削減された。地誌に関する大問の削減を見据え出題教科・科目の問題作成の方針には、「系統地理と地誌の両分野を関連付けた問題の検討」との内容が示されていたが、そうした問はほとんどみられなかった。「地域調査」の大問が「地理A」・「地理B」共通である点には、変化がなかった。

問題の形式については、1.「組合せ選択」の小問が多くみられること、2.「地理A」・「地理B」ともに地図や図表・グラフが多用されていることが指摘されたが、特に今年度は、「組合せ選択」の小問数の多さが際立った。また、3. GISが特に「地理A」において意識的に使われていることなどが指摘された。なお、これまでは、4. A・B共通の地域調査の大問で設問文が特に長いこと、5. 文の正誤判断や、長文の説明文中の下線部の正誤を問う形式の小問が目立つこと、なども指摘されていた。これらの点について以下に詳しく述べる。

1. について、解答に時間を要する原因の一つである6択以上の「組合せ選択」の形式は、今年度も「地理A」で10問、「地理B」で12問出題された。この他に、文中の空欄にそれぞれ適語を入れるなど2×2の4択となっている「組合せ選択」の小問が、「地理A」で9問、「地理B」で7問みられ、全体として「組合せ選択」の小問が大幅に増加した。「組合せ選択」の問は、定番の形式として受け入れざるをえないが、作問上、組合せではない4択にしにくいなど致し方ない場合を除き、安易に多用することがないよう強く要望する。2. については、「地理A」(地図・図19, うち地形図1, 地理院地図1, 表4, 写真・絵・イラスト7, グラフ6), 「地理B」(地図・図19, うち地理院地図1, 表5, 写真・絵・イラスト3, グラフ8)で、例年通り地図や表などを見て思考・判断する小問が多数みられた。地理である以上、適切に地図や図表を読み取る技能は重要であり基本的には歓迎する。ただし、高等学校までの学習を終えた生徒が理解に時間を要するような図表が多数出題されることがないように配慮をお願いすると同時に、地図や図表がこれ以上増えることのないようお願いしたい。なお地図については、地形図、地理院地図、Google Earth、国土数値情報、基盤地図情報など多様な地図が用いられた。3. について、GISを用いて作成された図は、今後も出題数が増加するだろうとの意見が多くあり、GISを用いて作成された様々な図を見慣れておく必要があると感じる。4. について、今年度の地域調査の大問は、近年のものや試行調査と比べると、設問文の長さや図表が精選された印象が残る。来年度以降もそうした作問の継続

を願いたい。5.について、今年度は、組合せ選択の小問の大幅な増加を受けて、4つの文の正誤を判定する小問が少数となり、長文の説明文や読み取りの文について文中の下線部の正誤判定をする小問も、ほとんどみられなかった。

3 「地理A」について

豊富な地図資料が提示された第1問や、生徒が作成したとする資料を提示するなどして学習の過程を取り入れた第2問, 第5問など, 共通テスト初年に相応しい大問の作成がみられ, 評価は高い。その一方で, 提示された豊富な資料に加え, 組合せ選択の小問が昨年度のセンター試験に比べて大幅に増加し, 30小問中19問を数えたことで, 解答に要する時間が増加したと考えられる点は, 課題である。また, 2単位を標準とする「地理A」では, 扱える学習の量はかなり限られたものとなり, 細かな知識レベルを前提とした設問は成り立ちにくい。しかし, 共通テスト初年度の「地理A」の各小問は, 概ね適切なレベルに作問されており, この点についても評価は高い。共通テスト初年度の平均点は, センター試験最終年度の昨年度よりもやや易しかった。難易度の調整については, 少なくとも今年度程度となるよう是非お願いしたい。

第1問 「現代社会における地図と地理情報の活用」 大問のタイトルが, これまでのセンター試験での「地理の基礎的事項および日本の自然環境と防災」やそれに類似したものから変更され, 大学入試センターが公表した「地理A」参考問題例で取り上げられた地理情報の活用に関するものとなった。「基礎的事項」がタイトルからはずれたものの, これまで「基礎的事項」に含まれていた自然環境に関する内容は, 地形図や空中写真, 地形断面図などを用いながらの小問が2問, 防災については, 地理情報やGISと関連させた小問が2問出題された。新学習指導要領の「地理総合」でより重視される「地図と地理情報」が前面に出され, 様々に工夫された地図資料が大問中に示されたが, これまでのようなメルカル図法等の世界図を用いて問う小問はみられなかった。

問1 新旧地形図を比較して, 現在住宅地として利用されている地点のかつての土地利用を読み取った文を選択する小問。難易度は標準。

問2 空中写真と数値標高データを用いて作成した断面図における自然堤防の地点と, 別に示された自然堤防について述べた文をそれぞれ選ぶ組合せ選択の小問で, 問い方に工夫がみられる。難易度としてはやや易。

問3 2地点間の移動についての異なる3つの経路を示した図と, 経路の長さや平日の異なる時間帯の所要時間を示した表との組合せ選択の小問。地理情報の身近な利用を題材に思考・判断を問う工夫された問。難易度はやや高い。

問4 統計地図の利用に関する小問。絶対数値である人口を表現するには, 相対的な表現である階級区分図は適さないという基本的な内容を問うており易。

問5 基盤地図情報などから作成された水域と等高線, 水域と危険性がある区域の2つの地図に示された3地点と, 各地点について災害時の避難場所の長所と短所を述べた文との組合せ選択の小問。地理情報の読み取りに関する問で, 標準の難易度。

問6 大規模地震発生時の帰宅に関する地理情報とGISの活用事例について述べた文の正誤判定の小問で, 易。この小問だけは, 大問中で唯一地図資料は示されず, 文のみによる出題であった。

第2問 「食文化」 センター試験においても例年出題されてきた生活・文化の大問で, 食文化をテーマに出題された。平成31年度の本試験「地理B」でコーヒーを題材に作問された産業に関する大問に続いて, 飲料であるタピオカミルクティーが題材として用いられた。また, 生徒

の学習場面を想定し資料を提示しながら設問が進む形式は、第2回試行調査第3問にみられたものであった。

問1 タピオカミルクティーの原材料であるキャッサバ、サトウキビ、茶と、それぞれの生産量上位国と世界に占める割合の円グラフとの組合せ選択の小問。知識を前提としており、「地理B」色が濃い。難易度は標準。

問2 資料がなく日本の輸入食料について述べた文だけが示された正誤判定の小問で、易。

問3 原材料となる三つの作物についての栽培起源地域と、1人当たり年間供給量、伝播の過程を示した表との組合せ選択の小問。年間供給量と伝播の過程から作物を特定し、そこから栽培起源地域と組み合わせる間で、解答にやや時間がかかる。問われている内容としては、標準の難易度。

問4 世界地図上に示された3地点と、茶文化を示した写真と説明文との組合せ選択の小問。中国とイギリスの写真と説明文は、ヒントとなるが、南アメリカのマテ茶に示された写真と説明文は、ヒントにならない。難易度は標準。

問5 食文化の多様性が生まれる背景についての会話文中の二つの空欄に示された具体例について選ぶ組合せ選択の小問。示された会話文と具体例を読めば解答でき、易。

問6 問2に続いて、正誤を判定する文だけが示された小問。持続可能な発展にはつながらない食文化についての文を選ぶもので、易。

第3問 「南アジア」 「地理A」の2単位の学習に当たっては、南アジアに関する地誌的な学習は十分に行われていない場合が多い。そうした中では、系統的な地理学習において学んだ内容をもとに判断していく問が求められる。小問中には、「地理B」で扱われるような南アジアやその周辺地域に関する地誌的知識理解が求められるものも見受けられたが、生活文化に関して写真をもとに考察させるなど「地理A」らしい小問も複数みられた。

問1 図中の1地点について、3地点における最多雨月と最少雨月が示されたグラフと、生産量が多い作物とを選んで組合せる小問。最多雨月と最少雨月が示されたグラフの見極めは、難しい。

問2 インドの灌漑について示された二つのグラフを読み取って述べた穀物の生産量の変化とその要因についての文の二つの空欄の組合せ選択の小問。示された資料は豊富で解答に時間はかかるが、問われた内容は易。

問3 南アジアの料理について示された写真に関する文中の二つの空欄に適する語の組合せ選択の小問。家畜や作物の地域的分布を問うもので、標準の難易度。

問4 インドにおける三つの食品と、それぞれの食品の2010年の1人当たり年間供給量と1970年との比較を示した表との組合せ選択の小問。鶏肉や牛肉よりも牛乳の供給量が多いことは判断できても、牛肉や豚肉に比べて宗教的制約を受けにくい鶏肉の生産拡大が著しいことは「地理A」の受験者には判断しづらく、やや難と考える。

問5 サリーとマドラスチェックに関する文中の二つの空欄の組合せ選択の小問。マドラスチェックの素材は、インドで綿花生産が盛んであることから類推して判断せざるを得ず、難易度は高い。

問6 インドの1人当たり州内総生産の図と、人口に関する三つの指標を示した表に関して述べた文中の下線部の正誤判断の小問。誤りは表を見れば明らかで易問であるが、示された文と資料が多く解答に時間がかかる。

第4問 「世界の結びつきと地球的課題」 「世界の結びつき」から3小問、「地球的課題」から3小問が出題された。示された図やグラフなどから思考・判断して解答する問が続き、解答には

時間を要したと思われる。

- 問1 東・東南アジアにおける2000年と2018年のコンテナ扱い量上位10港が示された図から、2018年のものと上位5港までを選ぶ組合せ選択の小問。シンガポールやジャンハイの位置や中国でのコンテナ扱い量の増加などをもとに判断するもので、思考力が問われる良問。難易度としては標準。
- 問2 イギリス、イタリア、オーストラリアの3か国間の旅行客の移動を示した図から国名を判断する組合せ選択の小問。各国間の位置関係や歴史的背景をもとに解答でき、標準の難易度。
- 問3 日本に在留するブラジル国籍とベトナム国籍の居住者について示されたグラフと図からベトナムのものを選ぶ組合せ選択の小問。難易度は標準。
- 問4 4か国の都市人口率と1人当たり1次エネルギー消費量の推移を示したグラフからドイツを選択する小問で、これも難易度は標準。
- 問5 砂漠化のメカニズムとその影響を示したフローチャート中の空欄への適語を選ぶ組合せ選択の小問で、やや易。フローチャートは、「地理A」参考問題例でも取り上げられていた。
- 問6 先進国と発展途上国との経済格差の是正に関する取り組みについて述べた文の正誤判定の小問で、易。正誤を判定する文だけが示された小問で、第4問の中で唯一資料が示されていない。

第5問 「京都府宮津市の地域調査」 地域調査に関する大問は、これまでも地形図や写真を含め図表など資料を多用した小問が並んでおり、それらの資料を読み取りながら思考・判断していく構成は、共通テストとなった本年度も同様のものとなった。しかし、対話文をはじめ長めの文章は少なく、地域調査の大問に関しては、例年よりも時間がかからず解答できたのではないか。作問中に取り上げられた天橋立は、直近にTV番組で扱われた地域であった。図として示された資料には、地形図ではなく地理院地図が用いられた。そのため「地理B」では、本大問を含め、地形図を用いた出題はみられなかった。なお、「地理A」受験者にとって特に不利になる小問はみられなかった。

- 問1 京都府の市町村別に作成された人口増減率と京都市内への通勤率の階級区分図を読み取って述べた人口に関する文の正誤判断の小問。資料の読み取りで、やや易。
- 問2 地理院地図と江戸時代の絵図を比較して読み取って述べた文の正誤判断の小問。江戸時代の絵図を用いた点が新しい。ていねいに両図を比較して読み取れば、易。
- 問3 天橋立を撮影した4枚の写真の撮影ポイントを、図に示された地点から選択する小問。細長く形成された砂州が、どの位置にどのような形で撮影されているかを図と比較できれば解答でき、難易度としては標準。
- 問4 丹後ちりめんについてまとめられた資料中の三つの自然条件と社会条件に関する空欄に適した語を選択する組合せ選択の小問。これも、難易度は標準。
- 問5 聞き取り調査をまとめた結果の内容から考察した文の正誤を判断する小問。誤りの文は明らかで、易。
- 問6 2018年の外国人延べ宿泊者数を都道府県別に示した図形表現図と2013年に対する比率を都道府県別に示した階級区分図を読み取ったことがらとその背景に関する二つの文中の空欄に適するものを選んで組合せる小問。解答に時間を要するが、問われている内容としてはやや易。選択肢の示し方が新しいものになっている。

4 「地理B」について（「地理A」との共通問題を除く）

大問構成と内容については、第1問がA・Bに分けられたことや、第3問が人口、都市である点なども含めて、平成29年度試行調査と同じであった。前年までのセンター試験と比べて大問数、小問数とも減少したが、図や写真、グラフ、表などの資料が豊富で、組合せ選択の小問も19問を数え、解答に多くの時間を要した。特に、自然環境を扱った第1問が、センター試験から共通テストへの変化を意識して作り込んだ大問であり、受験者としては第1問から大きなプレッシャーを感じたのではないかと考えられる。全体を通して解答そのものに迷う難問はほとんどみられなかったものの、共通テスト初年度の平均点は、センター試験最終年度の昨年度よりも難化し、「日本史B」・「世界史B」よりも低くなった。また、これまでと同様に成績上位層が高得点を取りにくい状況にも変化はなかった。来年度以降の改善を是非お願いしたい。

第1問 「世界の自然環境」 授業での生徒の学習場面を意識し、資料の読み取りや思考・判断を重視した大問で、A・Bに分かれ、世界の気候と自然災害の3小問と世界の自然環境やその変化の3小問が出題された。A・Bパートはいずれも力作で、新しい入試に対しての強い意気込みを感じることが出来、作問された先生方に敬意を表したい。しかしその一方で、題意の読み込みや資料の読み取りに時間がかかる小問が多かった。そのため、問うている内容は全体として基本的な学習事項を確認する内容ではあるが、正解率はそれ程高くはないと考えられる。

問1 緯度と標高が示された仮想気候の図から気温と降水量に影響を与える気候因子について考察する小問で、思考力を問う良問。内容としては基本的であるが、これまでにない新しい図の見せ方と問い方で難易度は標準。

問2 示された雨温図についての文中の空欄に適する語の組合せ選択の小問で、緯度による気圧帯の配置と気圧帯の南北への移動について問う。問1に続いて図の見せ方や問い方が新しい。しかし、雨温図を示さない形での出題には、否定的な声が多かった。内容としては、大気の大循環に関する基本的なもので、難易度は標準。

問3 自然災害の原因を考察した会話文の空欄に対する原因についての組合せ選択の小問。「災害のきっかけ」と「災害に対する弱さ」が、それぞれ何を意味するか設問文から読み取ることが出来れば、易。

問4 世界の変動帯と氷河の分布に関する小問。小問の解答を2つに分けそれぞれに点数を与えることに加え、会話文中の空欄に当てはまる正しい事象の個数を選択する新しい形式。内容は定番で、それぞれの分布が大観できていれば、易。

問5 与えられた写真にみられる森林の有無の要因を考察する生徒の発言の正誤を判定する小問。正誤を問う選択肢の作り方が新しい。問われた内容は、やや易。

問6 温暖化による氷河の縮小とその影響に関して示された模式図と文中の空欄に適する図と文を選んで組合せる小問。資料を丁寧に読み取り考察できれば、難易度は高くない。

第2問 「産業」 農業、水産業、工業、商業と各分野から出題された。6問中5問が組合せ選択の形式で問われた以外は、これまでのセンター試験での作問と大きな変化はなく、難易度も適当。内容としては、工業立地に関する小問が2問出題された。

問1 小麦の主要輸出国の小麦生産の特徴に関する表と、その背景に関する文との組合せ選択の小問。一つの小問の中で二つの事項について問うて組み合わせ解答する形式が多用されているが、本問もその一つ。難易度は標準。

問2 世界の漁獲量と養殖生産量の合計上位8か国の変化と、各国における内訳との組合せ選択の小問。アジアでの養殖業生産量の増加から判断でき、難易度は標準。

問3 模式図と文により示された条件から輸送費が最少となる地点を選択する工業立地に関する小問。第2回試行調査でも出題された工業立地に関する問と同様、図や情報を読み取って思考・判断する良問。難易度はこれも標準。

問4 問3に続き工業の立地に関する小問。原料と製品の輸送費の違いによる立地地点の相違を考察する組合せ選択の小問で、標準の難易度。良問との声が多かった。

問5 日本企業の海外進出における国・地域別製造業売上高の推移を示したグラフから進出先の3つの国・地域を判別する組合せ選択の小問。定番の間でやや易。

問6 商業形態の違いによる立地の特徴を問う組合せ選択の小問。これも定番の間で、難易度は標準。

第3問 「都市と人口」 「都市と人口」のみからの6小問で「生活文化」の小問はみられなかった。センター試験での出題においても、豊富に提示された図や資料を読み取り思考・判断する問が多かった分野で、センター試験との違いはほとんど感じられない。知識をもとに図などの資料やデータを読み取って考察する、学習の過程を意識した問いが作問されている。

問1 地域による人口100万人以上の都市の分布の違いを問う小問。国境のない白地図から南アジアのインダス川流域とその北東側の地域の都市の分布を問うており、やや難。

問2 オーストラリア、韓国、ケニアの国全体と人口第1位都市における年齢別人口構成が示されたグラフから国名と人口第1位都市のものを選ぶ組合せ選択の小問で、選択肢の示し方が新しい。ケニアでの年少人口率の高さと農村から都市への人口流出や、韓国の少子化が理解できていれば、難易度は高くない。知識をもとにグラフを読み取り思考・判断する良問である。

問3 世界のインド系住民について示した図を読み取った文の正誤を判断する小問。難易度は、やや易。

問4 東京都における3区市の年代別人口増加率の正しい組合せを問う小問。高度経済成長期の郊外化と近年の都心回帰が明瞭で、これもやや易。良問との声があがった。

問5 社会問題化している空き家についての問で、初見の資料をもとに社会生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面が意識されており、工夫された問となっている。地域による特徴の違いを判別する組合せ選択の小問で、難易度は高くない。

問6 タイペイの交通網について示された図とグラフについて述べた文の2つの下線部の正誤を判断する組合せ選択の小問。図と表を丁寧に読み取れば易。

第4問 「アメリカ合衆国」 アメリカ合衆国を地誌的に問う大問。アメリカ合衆国について示した図1に関するAパートと、アメリカ合衆国の社会と経済の多様性に関するBパートに分けての出題。2度の試行調査では、ヨーロッパとオセアニアが扱われており、はじめての共通テストでも先進地域から出題された。工夫された良問もみられるが、難易度はやや高い。

問1 アメリカの人口分布の重心に関する小問。第1問の問4の小問と同じく、小問の解答を2つに分けそれぞれに点数を与える新しい形式。難易度は易。

問2 三つの州における取水量の水源別割合と使用目的別割合についての組合せ選択の小問。各州が位置する地域や産業の特色が解答のポイント。初見に近い資料で、やや難。

問3 同緯度の西岸と内陸における気候と、農作物の違いについての組合せ選択の小問。西岸のワシントン州が、地中海性気候で小麦の栽培に適した気候であることを問うており、標準の難易度。

問4 ミシガン州とワシントン州における州全体と州の人口最大都市における人種民族別割合が示された円グラフからミシガン州全体を選択する小問で、工夫されている。五大湖沿岸

の工業都市でのアフリカ系人口の多さを理解できていたかがポイントで、やや難。

問5 予め明らかにされた各州の都市人口率の階級区分図を参考に、社会経済に関わる3つの指標についての階級区分図の正しい組合せを選択する小問。都市人口率が高位の地域で外国生まれの人口の割合が高位となり、低位の地域で持ち家率が高位となることから判断できる。与えられた図を参考に思考・判断する間で、難易度は高い。

問6 2012年と2016年の大統領選挙に関して示された図を読み取り与えられた文の2つの空欄に適する語句を組合せて選択する小問。直近に話題となった社会的事象である大統領選挙を題材に図の読み取りとアメリカ合衆国の産業構造の地域的差異を問うており、工夫された良問。問の難易度としては標準的。

第5問 「京都府宮津市の地域調査」 第5問の評価は「地理A」での記述の通り。

5 要 約

共通テスト(1)の「地理A」・「地理B」を小問単位で検証した結果、共通テストにおいても、これまでのセンター試験同様に、高等学校までの学習内容に沿った小問が大多数で、学習範囲を逸脱した難問や奇問はほとんどみられなかった。高く評価したい。また、思考・判断を重視した小問も多く、この点についても評価は高い。ただし、出題方針に示された地理的な諸課題の解決に向けて構想する力を問うものは、多くなかった。なお、「地理A」で出題された南アジアの地誌のように、あまり学習機会のない地域の出題に当たっては、知識に偏らないように注意をお願いしたい。また「地理B」では、受験者の「地理は異様に難しい」、「十分勉強したのに報われなかった」、「地理を選択すべきでなかった」という声は例年通り聞かれた。今年度も「地理B」は、「世界史B」や「日本史B」と比較して80点以上の高得点者は少なく、平均点も3科目中最も低かった。地理は、これまでのセンター試験においても、初年度となった今年度の共通テストにおいても、「地理A」・「地理B」ともに、知識をもとに思考・判断する力について十分に検証できる問題作りが行われてきており、そうした点についての評価は非常に高い。しかし一方で地理は、地理歴史科の選択科目の一つであり、「地理B」が並立して置かれている「日本史B」や「世界史B」の度数分布と大きく異なっていることは、望ましくない。そうした点を考慮するならば、日本史や世界史と同様に、一問一答の知識をストレートに問うような小問が増えてもよいのではないかとの声も聞かれる。来年度以降、今年度の評価を参考に、しっかり学習した生徒が高得点をとれるような作問をお願いしたい。

本会ではこれまで、1. 基礎・基本としての必須な知識を整理し、それを前提に作問し、それ以上のレベルの知識には必ず情報を与えること、2. 授業で扱うことのない専門性の高い内容や未だ研究段階で諸説あるような内容を安易に出題しないこと、3. 専門性の高い作問者の常識と受験者のそれとの落差に留意すること、4. 解答にかかる時間に十分に配慮すること、を重点としてお願いしてきた。本会は、学習の成果を踏まえた適切な設問であれば、たとえ難問でも評価し、歓迎する。

今年度は共通テスト初年度であり、これまで以上に作問者の先生方のご苦勞を感じ取ることができた。次年度以降も、われわれの手本となる問題の作成が行われることを期待して講評を終わる。

第3 問題作成部会の見解

地 理 A

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 地理に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。地理的な見方や考え方を働かせて、地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、地理的な諸課題の解決に向けて構想したりする力を求める。問題の作成に当たっては、思考の過程に重きを置きながら、地域を様々なスケールから捉える問題や、地理的な諸事象に対して知識を基に推論したり、資料を基に検証したりする問題、系統地理と地誌の両分野を関連付けた問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 この大問は、高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）「地理A」の「(2)生活圏の諸課題の地理的考察」における「ア 日常生活と結び付いた地図」に準拠し、日常生活の中でみられる様々な地図やGISの活用事例を取り上げることで、地理情報を適切に活用する技能を身に付け、多面的・多角的に地域の特色を見いだす力の重要性を理解させることを意図している。問1は地形や土地利用変化の読み取り、問2は地形と土地利用との関係の読み取り、問3はGISを活用した経路探索結果の地理的特徴の読み取り、問4は統計データの適切な地図表現、問5は自然災害時の避難場所検討、問6は帰宅困難問題対策におけるGISの活用について問うている。第1問全体の平均得点率は標準的であった。正答率の低い小問（問4）と、高い小問（問1）があり、難易度のバランスは調整されていたといえる。

第2問 本問は、学習指導要領の「(1)現代世界の特色と諸課題の地理的考察 イ 世界の生活・文化の多様性」に関する大問である。出題は場面設定型の構成となっており、生徒にとって身近な食文化であるタピオカミルクティーを切り口に、食文化の展開や多様性を中心に多角的に地理的特色を考察させる力を問うている。問1では食物が多く国から輸入されていることを考察させるきっかけとなる出題とし、問2では食物輸入の背景について諸制度や地域間の関係を思考する力を問うた。問3ではさらに食物の伝播について伝播の特質や栽培起源地を推測させる思考力を問い、問4では同じ食材でありながら各地でさまざまな食とその食べ方や社会環境も含め多様化している状況を考察できるかどうかという思考力を問う問題を出題した。そして問5は先生も交えながらこれまでの設問（授業）を総括し、食に関する伝播やグローバル化に関連する会話文を中心とした出題であり、問6では現在および将来に向けた問題解決策について出題した。問3は難易度が高く、問4の写真問題は平易であったものの、他の問ならびに大問全体としては標準的な得点であった。

第3問 本問は、学習指導要領「地理A」の「(1)現代世界の特色と諸課題の地理的考察」における「イ 世界の生活・文化の多様性」の地誌的事項に関する大問である。具体的には、南アジアにおける自然環境、産業、生活文化、社会変化を取り上げ、主題図、グラフ、表、写真などの資料を用いて、多面的・多角的に地域の特色と地域内の多様性を見いだす力を問うている。大問の内容としては、自然環境の多様性と農業、農業の近代化、食文化の形成された背景、食生活と文化との関係及びその近代化、服飾文化の特徴と背景、経済の地域間格差についての6つの小問で構成している。地域性や歴史的背景を踏まえて現代の生活・文化を考察できるよう

に、上記単元で学習した内容と、様々な地理的技能を組合せることで、多様な形式でのデータの読み取りと分析から地域的特色を考察させる作業を小問中に含めている。大問全体の平均点はわずかに低かったが、おおむね適切な識別力があった。

第4問 学習指導要領「(1)現代世界の特色と諸地域の地理的考察」の「ウ 地球的課題の地理的考察」に関する大問である。大問の前半では国家間の物・人・労働力の移動を、後半ではエネルギーや環境問題などの地球的課題、及びその解決をめざした対策を取り上げた。問1では、経済・社会のグローバル化に伴うモノの移動（物流）の様態とその変化を問うた。問2では、旅行者の移動を主題とし、取り上げた3か国の関係性を問うた。問3は、国際的な労働力移動を主題とし、近年の日本における外国人労働者の動態を考察する設問にした。問4では、エネルギー消費を主題とし、急激な産業化や都市化の帰結として地球全体が環境の持続可能性の問題に直面している事実の理解を問うた。問5では、砂漠化のメカニズムと影響を考察する設問にした。問6では、地球的課題の解決を目標として掲げ遂行された対策を取り上げ、課題によって考えられるべき対策が多様であることの意味を問うた。大問全体の平均得点率は標準的で、各小問の正答率をみると、問6で高く、一方で問1は顕著に低かった。また、識別力については、問3で低く、他の小問については大きな問題がなかった。

第5問 学習指導要領「(2)生活圏の諸課題の地理的考察」の「ウ 生活圏の地理的な諸課題と地域調査」に関する大問である。京都府宮津市を対象とし、幅広い事象について、さまざまな資料を活用し、大学入試共通テストで問いたい地理的な思考力・判断力・表現力等を多面的に問うた。特に問4～6は、「地域的な課題について多面的・多角的に考察し、解決策を合理的に構想（選択・判断）することができる」を念頭に置いた。問1では、人口変化の地域差を主題図から読み解く力を問うた。問2では、現代の地図と江戸時代の城下町絵図を比較して地域の変化を考察する思考力を問うた。問3では、地図上の砂州（天橋立）の形態から実際の風景を判断する地理的技能を問うた。問4では、地場産業の丹後ちりめんについて、自然環境や工業立地の観点から考察する思考力を問うた。問5では、山間部の過疎地の現況や地域振興について、その背景を考察する思考力を問うた。問6では、外国人宿泊者数の大都市部と地方部の違いを考察する思考力を問うた。全体として、正答率や識別力は標準的であり、「地理A」受験者に不利な小問はないと評価された。また、地域的に有利・不利の差は生じていないといえる。

3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問 現代社会における地図と地理情報の活用に関する問題で、基礎的な知識・技能とともに思考力を働かせて考察したり選択・判断したりする力を問う大問であり、さまざまに工夫された地図資料が大問中に示され知識・技能や思考力等が適切に問えているという評価を受けた。問1は、新旧地形図の対応による変化を読み取る問題であり、四つの場所それぞれ典型的な変化が見事に示されている良問であるという評価を受けた。正答率は本大問の中で最も高かった。問2は、微地形の形状と分布や特徴まで踏み込むことによって、知識の理解の質が問えているという評価を受けた。また、地理院地図の活用について、地形図を越えた新たな知見を地理学習の中で扱うことを促進することにもなる良問であるという評価もを受けた。問3は工夫された問であり、難易度は高いが、推察の過程で思考力・判断力が適切に問えている良問であるという評価を受けた。また、地図の表現方法や統計データも適切であり、交通機関の特性を考えさせることを十分に可能にしている見事な問題作成であるという評価もを受けた。一方、一部選択肢の表現が誤解を生む可能性があり、工夫が必要であるとの指摘もあった。問4は、紙地図教材やGISソフトウェアを使って行われる統計地図作成の地図作業学習を念頭においた出題であ

り良問であるという評価を受けた。正答率は本大問の中で最も低く、作図経験の有無によるところが大きいと推察されるとの指摘があった。問5は、混乱気味のハザードマップについて整理された概念に基づく出題となっており、考察の過程では読み取りの技能だけでなく、判断力が適切に問えている良問であるという評価を受けた。問6は、問1から問5の一連の出題のまとめという意義を持たせた出題となっており、効果的な配置であるという評価を受けた。大問全体としては、正答率の高低はあったものの、難易度のバランスはとれていたと考える。また、地図と地理情報の活用というテーマで一貫性のある構成としたことで、大問全体として良問であるとの評価につながったと考える。

第2問 場面設定型の展開であり、タピオカミルクティーという身近な素材から地理に対する興味が湧く問が多いとの評価を受けた。基礎的知識から思考力を働かせて考察する力を問うており、適切に知識・技能や思考力等が問えているとの指摘を得た。問1は生産統計から主原料を問う問題で、平易な問題であるが授業プロセスの導入として評価された。問2は世界各地の食べ物が日本で食べられる理由を政策や技術の進展等から考察する問題で、基礎的との指摘を受けた。問3は作物の栽培起源地域について、年間供給量と伝播過程から推察する問題で、栽培起源地域の知識と作物を推察する思考力が問われ良問であるとの指摘を受けた。問4は伝播によって形成された食文化についての写真問題だが平易であり、キャプションとの関係に工夫が必要との指摘も受けた。問5はグローバリズム・ローカリズムに関する問題で、平易との指摘も受けたが、身の回りの食文化を考える視点は重要である。問6は現状と今後の課題について条件に合わない選択肢を思考し選択する問題である。大問全体の構成、多様な資料の活用という点でも、生活・文化を問う上で適切な構成であったと考える。

第3問 南アジアの気候と農業、農業生産の変化、食文化、衣文化、社会問題についての基本的な内容について、知識・思考力・判断力等をバランスよく問えているとの評価を受けた。問1は、気候と農業を関連させた問題として人間生活と自然環境との関わりを問うた良問との評価を受けた。問2は、学習場面を設定し、会話文により考察の過程を問うているが易問との評価を受け、正答率も高くなった。問3は、食文化とその背後にある農産物や自然環境についての思考力を働かせて結び付ける良問との評価を受けたが、正答率が低く難問となった。問4は、「白い革命」や「ピンク革命」は基本的事項を表から読み取らせるところに工夫がなされているとの評価を受けた。問5は、マドラスチェックに関わる分かりやすい写真が用いられ、工夫された問題であるとの評価を受けた。問6は、資料の読み取りとそこから推論されることを適切に問うているとの評価を受けた。今回は問2で授業場面を想定した設問を取り入れることで、資料から読み取れることを適切に概念化できるかどうかを問うことを試みた。この小問では正答率が高くなりすぎたが、今後も有効な問題作成を検討したい。

第4問 大問全体としては、近年の経済活動の様子・変化を交えつつ基本的な知識を幅広く問う出題であり、レベルは標準であるとの評価であった。また、示された図やグラフなどから思考・判断して解答する問いが続き、解答には時間を要する問題であったとの指摘も受けた。問1は、コンテナ貨物取扱量から物流の変化を問うたもので、難易度は標準であり、よく練られた、思考力が問われた良問との評価を得た。しかし、結果的にはこの小問の正答率は非常に低かった。問2は、シンプルな図でありながら、バカンスなどに伴う人の移動や、国家間の地理的距離などに着目して3か国を推察する標準的な難易度の問題であり、知識と思考力を適切に問えているとの評価を得た。問3は、在留ブラジル人と在留ベトナム人の居住者数・居住地に関する問題で、標準的な難易度の問題との評価を得た。問4は、地球的課題からエネルギー消費について、先進国、新興国、資源産出国の違い、消費や政策の違いから考察する問題で良問であると

の評価を得た。一方で、風力も1次エネルギーに入ることから、風力発電の盛んなドイツが含まれる本問では、横軸は「1人あたり化石燃料消費量」で設定することがより適切ではないかとの指摘を受けた。問5は、砂漠化のメカニズムとその影響を示した模式図から、因果関係を思考力・判断力を働かせて解答する問題であり、やや易しい設問との評価を受けた。模式図全体を活用するほか、探究学習の位置付けとするなど、出題方法にもう一工夫欲しいとの指摘もあった。問6は、地球的課題から経済格差の是正の取組みについて適切なものを選ぶ知識を問う問題であり、小問自体は易しいものの、大問内のバランスを考慮すると適切であるとの評価を受けた。全体を通して、分量や出題の形式に注意しながら、過度に単純あるいは複雑な問題にならないように小問をバランス良く配置して、より良い地理的思考力を問えるような出題を心掛けたい。

第5問 新旧地図の比較や統計データを含む各種資料の読み取りなど、従来の出題傾向を踏襲した問題構成であり、地理的な見方や考え方に基づいて解答する良問が多い点や設問文が精選された点が評価される一方、資料の読解に時間を要する問題があるとの指摘もあった。また、コンピュータ上で閲覧可能な地図を採用した点や地域調査の展開例として好適である点など、実際の授業等を念頭に置いた出題である点も評価された。小問別では、問1は、京都府内での宮津市の位置付けを示すが、技能のみで対応できると評価された。問2は、新旧の地図比較で江戸時代の絵図を用いた点が新しいと評価された。問3は、直前にTV番組で同じ景観が取り上げられて話題になったが、地理的スキルとして重要であり、標準的な難易度との評価を受けた。問4は、教室での学習を現実社会に生かすという観点から意義ある出題と評価された。問5は、地理の学習で身に付けた知識を活用できるかを問う良問と評価された。問6は、空欄補充とそれに関する特徴を組合せという出題形式が評価された。地域調査の問題として、臨場感を出しつつ思考力・判断力・表現力等を判別できる問題作成を、今後も追及していきたい。

4 今後の問題作成に当たっての留意点

- (1) 「地理A」の学習内容に概ね合致しており、豊富な地図資料に加え、生徒が作成した資料等を用いた学習プロセスに沿った出題が評価された。また、知識偏重ではなく、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くよう工夫された出題がなされている点についても評価された。一方で、単純な図表の読み取りや、前後の文脈で容易に解答に至ることのできる出題も散見されるという指摘も受けた。高等教育への影響を鑑み、また教科書の内容も踏まえ、求められる知識水準の共有化を進めるとともに、知識定着や地理的スキルの活用、更に地理的な見方や考え方の応用といった各側面を総合的かつ適切に問えるよう、今後の問題作成でも継続して留意する必要がある。
- (2) 難易度については、平均点は59.98点で、昨年度と比較して5.47点上昇し、「世界史A」や「日本史A」と比較すると高かった。過去5年間の「地理A」と比較しても高かったものの、評価書で指摘されたように、難易度としては適正であったと考える。ただし、今後の問題作成の際にも適正な難易度について十分留意したい。
- (3) 地図・主題図の活用については、特にGISの利用に関する出題が概ね評価された一方で、複数の地図や図表を組み合わせた際の難易度や読み取りにくさについて指摘があった。また、写真のカラー化や判読性の改善に対する要望もなされた。地図・主題図・模式図・写真を活用した出題や、それらと図表を組み合わせた出題については、出題意図の伝達や情報の読み取りやすさも含め、今後も重要課題として検討したい。
- (4) 全体として、高等学校教科担当教員・教育研究団体等からは学習指導要領の趣旨に沿った問題作成であるとの評価を受けた。今後も、作業的、体験的な学習を通じて地理的な技能や思考力・

判断力・表現力等を養うことを重視する「地理A」の内容に即した問題作成を継続していきたい。

地 理 B

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 地理に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。地理的な見方や考え方を働かせて、地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、地理的な諸課題の解決に向けて構想したりする力を求める。問題の作成に当たっては、思考の過程に重きを置きながら、地域を様々なスケールから捉える問題や、地理的な諸事象に対して知識を基に推論したり、資料を基に検証したりする問題、系統地理と地誌の両分野を関連付けた問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 学習指導要領「地理B」の「(2)現代世界の系統地理的考察」における「ア 自然環境」に関する大問として、世界の自然環境に関する問題を出題した。共通テストで新しく導入した場面設定型の大問であり、中間Aでは世界の気候と自然災害、中間Bでは山を題材にした世界の自然環境に関する問題を取り上げた。中間Aでは、問1に気候因子の理解をみる設問、問2に気候の成り立ちを大気大循環と関連付けて捉える力をみる設問、問3に自然災害の特徴・特性の理解をみる設問をおいた。また、中間Bでは、問4に世界の変動帯と氷河の分布についての理解あるいは推察する力をみる設問、問5に自然環境や景観を標高の違いなどに関連付けて捉える力をみる設問、問6に最近の山岳氷河の縮小とそれに伴う人間生活への影響について考察する力をみる設問をおいた。多様な形式の資料から、世界の自然環境の成り立ちや地域的特色について、空間軸と時間軸を踏まえ多面的・多角的に思考・考察する力をみることを意図した。小問の正答率は問2と問4の 5 でやや低く、大問全体の平均得点率は標準よりも若干低かった。しかし、識別力の点では各小問で大きな問題はみられなかった。

第2問 本問は、学習指導要領「地理B」の「(2)現代世界の系統地理的考察」のうち、「イ 資源、産業」に関する大問である。世界と日本の産業に関する諸事象の空間的な規則性、傾向性やそれらの要因などを系統地理的に考察させることを目的としている。問1と問2は世界の食料問題と生産地域に関する出題である。問1は世界の小麦の生産量の変化とその要因に関する出題で、正答率は標準的であった。問2は世界の漁業生産の変化を主題図から読み取る問題で、正答率は高かった。問3と問4は工業立地に関する出題。問3はウェーバーの輸送費モデルに基づき最適立地を検討する問題で、正答率は高かった。問4は実際の工場立地パターンとその要因を考察する問題で、正答率は標準的であった。アイスクリームは製品を冷凍輸送する必要がある点以外に、原料がバターや脱脂粉乳など中間加工品であることを注記したが、その意図が伝わったかやや疑問が残る。問5は日本企業の海外進出に関し地域別シェアを判定する問題で、ASEANと中国の見分けがつきにくかったため、正答率は低かった。問6は日本国内の小売業形態別にみた立地の特徴に関する問で、業態と立地の組み合わせで解くのが難しかったため、正答率は非常に低かった。小売業全体の立地と比較しながら考えてほしかったが、ロードサイドの統計上の定義と受験者のイメージの間にギャップがあったかもしれない。大問全体の平均点は他の大問に比べるとやや低かったが、判別力は十分高かったと考える。

第3問 本問は、学習指導要領(2)「現代世界の系統地理的考察」のうち、「ウ 人口、都市・村落」および「エ 生活文化、民族・宗教」に関する大問である。各小問では人口や都市に関する系統地理的な概念的知識をもとに、提示資料から正答に至るまでの過程を思考させるようにした。

問1は都市がどのような社会, 経済, 自然条件のもとで立地しているかを問うた。問2は人口動態の異なる国々における人口構成及びそれぞれの国における国全体と大都市間にみられる人口構成の違いを考えさせる設問とした。問3は印僑(在外インド人)を取り上げ, 人口の国際移動とその背景を考察させることにした。問4では都市内部構造の変容(都市化, 郊外化とドーナツ化, 近年の都心での人口増)について問うた。問5は市区町村別のデータから確認できる空き家の種類と構成をもとに, それぞれの都市を取り巻く状況について思考させた。問6は近年の経済成長とともに急速に発展した新興国の大都市特有の課題解決に向けた, 公共交通整備に関する地理的・政策的な特徴を思考させた。大問全体の得点率は標準的であったが, 問4の正答率が低かったのに対し, 問5の正答率が極めて高かった。

第4問 本問は, 学習指導要領「地理B」の「(3)現代世界の地誌的考察」における「イ 現代世界の諸地域」に関する大問である。具体的には, 「アメリカ合衆国の多様な地域性と社会的分断」をテーマに, 同国における自然環境, 人間活動および社会状況を取り上げ, 主題図や統計図表などの資料から, 多面的・多角的に地域的特色を見出す力を問うている。大問の内容としては, アメリカ合衆国の地域性を形作る人口分布の変化とその要因, 水資源と水利用, 2州における自然環境と農業の特徴, 州・都市単位での人種・民族別人口構成, 州単位での社会経済的差異, 大統領選を題材とした政治行動の地域差とその要因についての6つの小問で構成しており, 近年も頻出の地域であることから, 出題に際して, 内容の重複がないように留意した。「(1)様々な地図と地理的技能」で学習した成果を活用して上記のテーマを考察できるように, 単純な知識を問うのではなく, さまざまな形式でのデータの読み取りと分析から地域的特色を考察させる作業を小問中に含めている。大問全体の平均点は他の大問に比べるとやや低かったが, おおむね標準的だったと考える。

第5問 学習指導要領「(2)生活圏の諸課題の地理的考察」の「ウ 生活圏の地理的な諸課題と地域調査」に関する大問である。京都府宮津市を対象とし, 幅広い事象について, 多様な資料を活用し, 大学入学共通テストで問いたい地理的な思考力・判断力・表現力を多面的に問うた。特に問4～6は, 「地域的な課題について多面的・多角的に考察し, 解決策を合理的に構想(選択・判断)することができる」を念頭に置いた。問1では, 人口変化の地域差を主題図から読み解く力を問うた。問2では, 現代の地図と江戸時代の城下町絵図を比較して地域の変化を考察する思考力を問うた。問3では, 地図上の砂州(天橋立)の形態から実際の風景を判断する地理的技能を問うた。問4では, 地場産業の丹後ちりめんについて, 自然環境や工業立地の観点から考察する思考力を問うた。問5では, 山間部の過疎地の現況や地域振興について, その背景を考察する思考力を問うた。問6では, 外国人宿泊者数の大都市部と地方部の違いを考察する思考力を問うた。全体として, 「地理A」と共通問題であり正答率はやや高いものの, 識別力は適切であった。また, 地域的に有利・不利の差は生じていないと判断される。

3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問 全体として, 題意の読み込みや資料の読み取りに時間がかかったものの, 単純な知識を問うものは少なく, 考えさせる良問が多かったとの評価を受けた。問1は, 仮想大陸上の地点間で気温と降水量に影響を与える気候因子を相互に比較考察する思考力を問うた良問との評価を得た。問2は, 雨温図から気候区を判別する技能や大気大循環に関する理解などが求められる良問との評価がある一方で, 雨温図を示さない形での出題形式に否定的な見解もあった。問3は, 自然災害に伴う被害を「ハザード」と「脆弱性」に分けて考える近年の学問の流れを踏まえたものとの評価を受けた一方で, 解答は言語的能力による部分も強いという課題が指摘

された。問4は、大地形に関する基本知識と、山岳氷河の分布をキリマンジャロ山を基準に緯度・標高から判断する力が求められた問いで、事象の個数を選択する新しい形式の設問との評価を得た。問5は、与えられた写真にみられる森林の有無の要因を考察する生徒の発言の正誤を判定する問いで、内容は平易だが、これも正誤を問う選択肢の作り方が新しい設問との評価を受けた。問6は、資料が示す意味を正確に理解し、氷河融解によって生じる地表水の変化（自然現象の動的な見方）とその利用（影響）を判断する力が求められる良問との評価を得た。今回は共通テストとして重視される「地理的思考力を問う」ことを強く意識した出題とし、結果として一定の評価をうけた。一方で、本問は場面設定型の大問だったこともあり、出題形式や資料の読み取りに時間がかかる問になった。全体を通して、いかにして必要最小限の資料に基づいて思考力を測るか、分量や出題の形式に配慮しながら、引き続き高い地理的思考力を問えるような出題を心掛けたい。

第2問 産業に関する大問で、農業、水産業、工業、商業の各分野から出題され、各種統計資料の読み取りを通して地理的知識と論理的思考力が試される内容であり、全体としての難易度は適当であったとの評価を得た。問1の農業と問2の水産業に関する出題は、地域と説明や項目とを組合せて考える形式で、多面的な思考が求められる良問との指摘があった。工業立地に関する出題では、問3で等費用線モデルを用いた抽象的概念の操作を、続く問4では乳製品工場の立地という具体的現象の分析を行うことで、仮説と検証を関連付けた新しい試みである。特に、問4は扱われた事例が受験者にとって身近な乳製品であること、前問のモデルを応用すれば原料地立地、消費地立地、自由立地の3類型が導けることから、非常に工夫された良問であるとの評価を得た。日本企業の海外進出に関する問5は、出題形式が単純な地域判別であり、事前評価では「やや易」とされたが、得点率は予想を下回った。小売業の業態別立地に関する問6は、これまでも出題されてきた内容であり、難易度は「標準」と予想したが、採点結果からは難問で識別力が低かった。大問全体としては、複数項目の組合せ解答や理論仮説と実証分析の関連付けなど新たな出題方針は理解と支持を得たが、表現形式や難易度の設定については課題が残る結果となった。

第3問 従来のセンター試験の形式を踏襲した構成で、出題分野も都市と人口に絞られていたが、問いの中には複数の思考を踏むことが必要なものや地理的学習の過程を意識したものも見られたとの評価であった。問1は都市の分布について、地形や産業立地など、様々な観点から解答を導ける良問であるとの指摘を受けた。問2は新しい出題形式で、地理的知識をもとに各国の年齢別人口構成の特徴を比較・検討する良問であるとの評価を受けた。問3は印僑（在外インド人）の分布図をもとに文の正誤を問う簡潔な出題形式で、難易度もやや易との評価であった。問4は東京都における3区市の年代別人口増加率について、統計や地図を用いながら問うた良問であるが、難易度はやや易と評価された。問5は社会問題となっている空き家を取り上げられており、難易度は高くないものの、課題を発見し、解決方法を構想する場面が意識された問いとの評価を受けた。問6は海外の交通網を用いた出題で、難易度は高くないが、初見となる図や表を丁寧に読み取る力が必要との評価であった。今後も新しい出題形式を模索しつつ、地理的思考力・判断力を問えるような出題を目指したい。

第4問 本大問に対して、統計資料、グラフ、分布図などを多用し、多面的に地理的事象を読み取らせようとする良問であるが、難易度はやや高いとの評価を受けた。問1は人口重心の移動に関する問題であり、アメリカ合衆国の発展の歴史を人口移動と結びつけて多面的・多角的に考察させる良問であると評価された。問2では、各州の自然環境の違いに加え、産業構造や人口分布の理解をふまえた地理的思考力を試す良問との意見があった一方で、取水量に関する資

料が初見なのでやや難との指摘もあった。問3は二つの州の気候の違いから農作物の違いを問うもので、小問の中に地誌的な見方も問うている良問であるという評価を受けた。問4は州全体と各州人口最大都市の人種・民族構成について比較、検討する問題であり、州スケールと都市スケールの違いにも焦点を当てたが、複数の知識を組合せて出題しているのがやや難しいと評価された。問5は各州の都市人口率の階級区分図を手掛かりに、三つの社会経済的指標の関連性を問う設問であり、やや難しいと評価された。問6はアメリカ大統領選挙の結果について示した主題図とその背景を考えさせるもので、良問であるとの評価であった。本大問は、基本的な地理の知識を基に、時事問題に触れつつ理解力、思考力、判断力を適切に問う出題がなされていると評価された。細かな知識を問うのではなく、基礎的な地理の既習事項と多様な資料を組み合わせる地理的思考力を問う出題を心掛けた。今後も良好な評価を得られるように努めたい。

第5問 新旧地図の比較や統計データを含む各種資料の読み取りなど、従来の出題傾向を踏襲した問題構成であり、地理的な見方や考え方に基づいて解答する良問が多い点や設問文が精選された点が評価される一方、資料の読解に時間を要する問題があるとの指摘もあった。また、コンピュータ上で閲覧可能な地図を採用した点や地域調査の展開例として好適である点など、実際の授業等を念頭に置いた出題である点も評価された。小問別では、問1は、京都府内での宮津市の位置付けを示すが、技能のみで対応できると評価された。問2は、新旧の地図比較で江戸時代の絵図を用いた点が新しいと評価された。問3は、直前にTV番組で同じ景観が取り上げられて話題になったが、地理的技能として重要であり、標準的な難易度との評価を受けた。問4は、教室での学習を現実社会に生かすという観点から意義ある出題と評価された。問5は、地理の学習で身に付けた知識を活用できるかを問う良問と評価された。問6は、空欄補充とそれに関する特徴を組合せて問うという出題形式が評価された。地域調査の問題として、臨場感を出しつつ、思考力・判断力・表現力等を判別できる問題作成を、今後も追及していきたい。

4 今後の問題作成に当たっての留意点

- (1) 「地理B」の指導要領の目標と内容に沿っており、地誌以外の大問について地域的な偏りはなく、系統地理の各分野のバランスや、理論とその応用のバランスに配慮した適切な出題であるとの評価を得た。その一方で、資料数や文字数が多く、読み取りや因果関係の把握・考察に時間を要する出題も散見されるとの指摘もあった。これらについては、系統地理学的な知識や図表読解という地理的な見方や考えから解答に到達できるように出題しており、この観点から引き続き問題作成を行っていききたい。
- (2) 難易度については平均点が60.06点で、昨年度と比べて6.29点低く、「世界史B」や「日本史B」と比べても低い結果となった。ただし、評価書で指摘されたように、難易度としては適正であったと考える。また、センター試験の際と同様に、「地理B」では標準偏差が小さく、高得点を得にくいとの指摘を受けた。「世界史B」や「日本史B」との難易度調整にも配慮しつつ、引き続き適正な難易度の問題作成を目指したい。
- (3) 地図をはじめとした多様な資料を活用した出題が評価される一方で、資料数の多さやその読み取り難さについて指摘があった。また、写真の判読性の改善等に関する指摘が本年度もなされた。これらの課題について、今後も継続して検討を重ねていく必要がある。
- (4) 出題のバランスについては、全体的に高等学校で学習した知識、技能、地理的な思考力や判断力を問う出題になっているという評価の一方、センター試験と比べて比較地誌の出題が減ったことによる分野的な偏りに関する懸念も示された。ただ、学習プロセスを設定した出題など、資料

を基に因果関係や相互関係を考察したり，理論と現実的な地理情報との関連について考察したりする出題が増加しており，比較地誌的な出題の取り扱いについては，今後も検討の余地があるといえる。

- (5) 全体として，高等学校教科担当教員・教育研究団体等からは指導要領の趣旨に沿った問題作成であり，高等学校の学習範囲に沿って，地理の基本的な知識を問う問題から，地理的な見方や考え方や地理的技能を基にした考察力や思考力を必要とする問題まで幅広く包含したバランスの取れた問題と評価されたといえよう。次年度以降も，地理的な思考力・判断力・表現力等を多面的かつ多角的に問うことのできる内容で，かつ適切な難易度・分量で出題する努力を継続していきたい。